

# 八朔の馬節供

## 西讃地方の団子馬製作を中心に

服 部 比呂美

### はじめに

香川県丸亀市・仲多度郡・三豊市などの西讃地方では、旧暦8月1日の八朔を「馬節供」と称し、男児の誕生と成長を祝っている。馬節供の名称は、馬台と呼ばれる骨組みに、米粉を使った団子を盛り上げて作る「団子馬」を、武者人形などとともに床の間や玄関などに飾ることに由来する。かつてはさかんに行われていた習俗であるが、現在では団子馬作りの継承者は数えるほどとなり、伝承がかなりうじて繋がっているという状態である。

本稿では、丸亀市や仲多度郡琴平町などで行った調査から、団子馬製作の方法やその担い手の現状などについて報告する。さらに、西讃地方周辺の八朔の飾り物の歴史と広がりを見ながら、団子馬の位置づけを行ってみたい。

なお、西讃地方とは、中讃と西讃とを厳密に分けて用いる場合もあるが、本稿では区別せず、西讃地方を広義にとらえ、東讃地方と区別している。

## I 八朔に関する研究

本節ではまず、民俗学や歴史学の研究分野で、八朔がどのようにとらえられてきたのかをまとめておきたい。

八朔は、稲の穂が出る時期にあたり、農村では豊作祈願や予祝などの儀礼が行われてきた。たとえば、初穂を刈って神にささげたり、主人が田をめぐりながら田の神に豊穰を祈願する「田誉め」を行ったり、稲作が害虫の被害に遭うことを防ぐための虫送りをしたりなどである。

また、八朔に上巳（3月3日）や端午（5月5日）の節供に等しい行事をすることもある。『日本民俗地図』によれば、広島・香川・愛媛・福岡・佐賀県にかけては、八朔に米の粉で作った馬や人形を飾り、子どもの成長を祈願している。中でも香川県の西讃地方では、男児の誕生と成長を祝う「馬節供」が行われている。

このほか、八朔は季節の節目とも考えられ、夜なべ仕事が始まる日、奉公人の任期が終わる日、さらに一連の盆行事の終わる日とも考えられている。

以上の行事とは別に、八朔には、日ごろ恩恵を受けている人に贈答品を贈る「憑み」の節供としての性格がある。これは特に武家社会に顕著な風習で、室町幕府には八朔奉行または御憑奉行おたのみと称する

役職が置かれ、諸大名からさまざまな献進を受け、また宮中に馬や刀剣を献上する役目を負った。江戸時代には、八朔に徳川家康が白装束で江戸に入府したことにちなみ、公式の祝日として重んぜられ、御三家、譜代、外様の諸大名をはじめとする諸侯が江戸城には白帷子長袴を身につけて登城し、宮中では、幕府から献上された馬を天覧に供する儀式が行われた。

こうした八朔に関する研究は、民俗学や歴史学などによって進められてきた。和歌森太郎は、「八朔考」<sup>21)</sup>で、文献と伝承とを視野に入れながら、八朔行事の起源について分析している。鎌倉末期から公家社会でも行われるようになる八朔憑の贈答は、武家社会からの移入であり、さらに武家社会のそれも、元来は農村における民俗の展開であると述べた。つまり、憑の贈答は、田の作物の豊作を願う呪術的なものに起因し、八朔の贈答品に牛馬や茶碗、鍋などが見られるのは、農を手助けした牛馬の労をねぎらい、稲作協力者に感謝するという農村風俗の反映があるためであるという。

五来重は「宗教歳時記」<sup>22)</sup>で、

要するに八朔の節供は、農民が「田の実」(稲)を穂掛けすることからはじまり、「田の実」は「頼み」に転じて、奉公人が主人に忠誠をちかう儀礼に変わった。これは東国農村から身をおこした鎌倉武士の主従関係を強化する儀礼として武家の節供となり、やがて公家のあいだにも普及した。(中略)しかしこれは一方では武家社会の派手な儀式贈答に発展していくとともに、民間でも餅や人形の贈答に転換してしまった。そのような中で八朔の焼米や八朔の苦餅の伝承は、かつての貧農や奉公人の苦悩を民俗としてのこしたものである。

このように、八朔行事は農村風俗が出発点にあり、それが武家、そして公家の社会で儀礼化した、と和歌森と同様の見解を示しながらも、武家、農村それぞれの展開がなされたものと述べている。

これに対し歴史学では、二木謙一が、八朔行事は、農村社会→武家社会→公家社会という文化上昇の過程で成立していったと見る民俗学の立場を一応肯定しながらも、その研究が時間的な把握が曖昧であることや、具体的な説明に乏しいことを指摘している。また、時代の経過という意味では、公武で行われた風習が民衆に下降し、元来の農村習俗に影響をおよぼす可能性があることを示唆している。二木はこうした問題に着目し、『中世武家儀礼の研究』<sup>23)</sup>の中で、文献資料を駆使しながら、室町期における公・武・民衆文化の接触・伝播融合、およびこれに関する足利政権・室町武家の位置などの点から八朔行事を検討している。少々長いが、結論部分を引用する。

収穫を前にした予祝儀礼、あるいはユイ(結い)という農村の協同労働組織におけるタノミ(頼み)としての贈答の風が、やがて鎌倉末期から南北朝期における農村出身の地方武士の広域な流動の中に、目上・長上に対するタノミとしての八朔憑の贈遺がなされるようになったのであろう。鎌倉幕府ではこれがいまだ儀礼としては成立し得なかったが、足利政権成立とともに儀礼化がなされたのであった。そしてこのことこそが、まさに足利武家のはたした大きな役割であったといえよう。この室町幕府による儀礼化があったからこそ、公家社会にも入り、後世、江戸幕府八朔につながるものが育てられたと思うのである。さきにみたように、足利將軍を中心に盛んに行なわれていた人々の八朔贈答の風を、洞院公賢のような南北朝期の知識階級の公家衆等は、公家社会の伝統にない無意味な世俗の風と冷淡にみていた。しかし足利政権が安定期を迎える応永頃になると、一条経嗣が、これを行なわないのはかえって奇怪に感じたほどになっていたのである。

この頃すでに八朔が幕府の年中行事として成立し、贈答のしきたりや故実までが定まっていたのであった。将軍と朝廷間の贈答、公家衆や武家衆と将軍との贈答、その慣例や贈答のルールさえできあがっていた。ここにいたっては足利将軍を中心とする儀礼的世界から、もはや公家社会も無関係ではいられなくなった。かくて室町幕府儀礼の影響を受け、公家社会においても儀礼として根をおろすことになったのであった。(中略) 一たび公家社会の儀礼として成立すると、その伝統の保持は、やはり武家の比ではない。応仁の乱後、公・武の多くの儀礼は衰退を余儀なくされたが、それでも諸儀礼の維持存続は武家よりも公家社会の方が強かった。(中略) しかも室町幕府が滅亡しても、朝廷の八朔は行なわれ続けた。そしてその伝統が、公家衆等の豊臣秀吉や徳川家康への八朔参賀として向けられ、近世における江戸幕府の公式儀礼としての八朔行事成立へとつなげられたと思われるのである。

このように述べた後「むろんこれは一つの想像の域を脱するものではないが」と断ったうえで、「八朔は、元来農村の風俗であったが、武家に入り、室町幕府や朝廷の儀礼として上昇すると、その公家や武家社会に行われていた慣習が、再び農村に下降してきた時には従来の農村の風習に、新たな公家や武家的な要素が加味されたに相違ない」として、「馬節句と称して八月一日に<sup>しんこ</sup>糝粉細工の馬を贈る風習なども、室町期以降における武家社会の太刀・馬贈答の、民間への伝播によって生まれた風俗と考えることも可能ではあるまいか」と結んでいる。

二木の考察は、史料をあげながら八朔行事の経過を論じ、民俗学では曖昧であった部分を明らかにしており、妥当性のあるものといえる。しかし、馬節供の呼称は、室町幕府の本拠地であった京都周辺にはまったく見られないことや、広島と香川という局所的な地域に分布していることなどに関しては説明されていない。宮中に馬が献上された儀礼が、伝播の結果、周圈的に広島・香川に残ったと考えればよいのであろうか。

山田邦明は「鎌倉府の八朔」<sup>4)</sup>で、室町以前の記録である海老名季高の「鎌倉年中行事」から、関東の「八朔御祝」の内容を明らかにしている。また、この八朔の儀は、鎌倉から古河に移った公方が継続して行っていることや、南関東を治めていた北条氏の領国にも生きているという。こうした点から、江戸幕府の八朔儀礼は室町幕府や公家社会の伝統を取り入れたものであるとする二木の見方に対し、八朔儀礼は鎌倉府から古河、南関東のように京都とは異なる場でも展開し、徳川氏のそれにつながってゆくという別の回路が想定できるのではないかとしている。山田の見方を敷衍するなら、西讃地方の馬節供はもともと在所の民俗にはなく、そこを治めた領主によって特化された八朔行事となった可能性もあることになる。

このほか、歴史学の視点からは、本郷恵子が「八朔の経済効果」<sup>5)</sup>で、中世の人びとの贈答感覚と経済感覚を論じている。返礼義務のある八朔の贈答は、足利幕府にとってかなりの負担であった。山門と対立し、幕政の中枢にいた醍醐寺の僧・満濟は、山門の影響の及ばない土倉から300貫の資金を借用しているという。このように現金の授受や財産の管理が金融業者を通じて行われることが一般的だった中世には、荘園領主の経済圏とプロの金融業者の経済圏が別に存在していたとし、折紙・太刀・馬など八朔の贈答品は前者における内部通貨として機能していたのではないかと述べる。

また、伊藤信吉は「八朔における贈答関係の一考察」<sup>6)</sup>で、荘官・職人・奉公人などの階層におけ

る八朔を視野に入れて考察を進めている。たとえば『大乘院寺社雑事記』（寛正6年）や『北野社家日記』（延徳元年）、『證如上人日記』（天文15年）には、大工・河原者・桂（桂女か）・土器師などが、大乘院尋尊・北野社松梅院・本願寺證如にどのようなものを献上しているのかが書かれている。これによれば、土器師の献上品が小土器であるように、献上品はおよそ献上する者の職業に関係の深い品であることがわかるという。また、民俗学で述べられてきた、八朔は奉公人の出替わりの時期であることについては、『言経卿記』には、山科家では8月上旬を中心に奉公人の解雇・雇用が行われていることが記されているという。たとえば、文禄4年8月1日の条には「小者孫一・下女松等永イトマ遣了」、天正18年8月6日の条には「下女弥々暮々より小大夫口入ニテ〈始而〉置之」として、口入れて始めて雇ったことが書かれている。このように、歴史学では、史料の内容を詳細に分析しながら八朔に関する研究を進めている。

民俗学では、こうした史料から具体的に奉公人の入れ替わりを示したものはなかったが、ここに、越後支領・柏崎陣屋詰の勘定人であった渡邊勝之助の「柏崎日記」の記事をあげておく。天保13年（1842）8月4日に新たな子守りを雇い入れた内容がある。

御門先の大工の娘守り遣しくれ候様頼置候所今朝参り候。年十一名はおさと申す器量も相応にて無口のおとなしき娘のよし。咄の通也。親父は去年病死致し兄は十五歳になり、十二の時より関東へ稼に遣し母と兩人居り候由。今朝母ついてまいり申すには、御坊様おぶり申して私方へお遣し被下と申すと也。まだ年まいり不申。私が付て居り気をつけますと申由也。真吾はだに負せて出し候へば久しく遊んでまいり候。小坊主の守りお六のつれ、誠に能き者見付申候<sup>7)</sup>。

近年の民俗学の成果としては、市町村合併にともなう市町村誌の刊行にともない、これらの民俗編に八朔のあり方が新たに記載されたことがあげられる。四国に関していえば、四国民俗学会では『四国民俗』第39号で八朔特集を組み、各県の執筆者がそれぞれの県の八朔習俗についてまとめている<sup>8)</sup>。こうした仕事があるものの、馬節供だけに焦点をあてて、その分布や歴史性を検討したものは見られない。そこで、次節では、西讃地方の馬節供に飾られる団子馬製作の現状を報告し、文献などからこの習俗の歴史を遡ってみたい。

## II 西讃地方の団子馬製作

香川県の西讃地方では、八朔には馬節供が行われている。男児が誕生した家では、床の間に神功皇后や武内宿弥の人形、張子の虎とともに、米の粉で作った団子馬を飾り、男児の健やかな成長を祝うものである。かつてはこの飾りの前で、親戚や知人を招いて宴席を設けるなど、盛んに行われていたようであるが、近年ではこうした風習もなくなりつつある。

本節では、丸亀、多度津、善通寺、琴平、仁尾などで行った現地調査から、西讃地方の団子馬製作の現状を報告し、香川県内の団子馬の分布や歴史について考察する。

調査地の概要について少々ふれておくと、香川県は、南は徳島県、南西の一部は愛媛県に接し、残る三方は瀬戸内海に面している。南方に連なる四国山脈と海岸線の間を開かれた肥沃な讃岐平野には、集落が発達している。年間を通じて晴天日数が多く降水量が少ないため、用水は川からではなく、平

地部に点在する溜池を用水源としており、満農池は日本最大の溜池として知られている。県域内に120近くの島があるのも特徴で、これらは直島・男木島・女木島の一群と、小豆島およびその属島、塩飽諸島、伊吹島に4分することができる。

香川県は、近世には讃岐国で、この時代の社会体制は、天正15年（1587）、生駒親正が豊臣秀吉から讃岐国15万石を与えられて以降、整えられていった。親正はまず高松城を築いて城下町を建設し、のちに丸亀城も築いた。その体制は安定しているかに見えたが、寛永17年（1640）の生駒騒動によって、生駒氏が出羽国矢島1万石へ改易され、その後の讃岐国は、東讃と西讃とに領主を立てられることになる。

東讃は、寛永18年（1641）に松平頼重が高松城に入り、東讃岐12万石を治めることとなる。大坂に近い交通の要地に親藩が誕生したわけである。高松藩は学問を奨励し、元禄期に藩財政が悪化した時は、徹底した儉約政治の実施によって、藩財政を再建した。

西讃岐5万余石には、山崎家治が廃城となっていた丸亀城に入り、領主となって城下町の建設を進めた。しかし、世継ぎに恵まれず三代で改易、万治元年（1658）からは、京極高和が丸亀藩を治めることとなった。元禄7年（1694）には丸亀藩主の庶子・京極高通が1万石を分知されて多度津藩が独立し、讃岐国は3藩体制となった。

寛文12年（1672）、河村瑞賢の西廻航路開発以来、讃岐国にも北前船によって他国のさまざまな特産物が持ち込まれ、讃岐国からは、塩・砂糖・綿のいわゆる「讃岐三白」が積み出された。海の交通には塩飽諸島や直島の水夫が活躍したといい、実際塩飽では、延宝から享保期（1673-1736）には約200艘の廻船を保有していたという。

海の向こうから讃岐国にやってきたのは、物資だけではなく。金比羅大権現（現在の金刀比羅宮）への参拝者もまたこの地を訪れ、活気と豊かさをもたらした。天保4年（1833）、丸亀藩の六代目藩主・京極高朗は新たに丸亀港を築造し、金比羅大権現への参拝者のため、丸亀と大坂との間に定期往来船を就航させた。丸亀に続き、天保9年（1838）には多度津港が完成し、両港は金比羅大権現参詣の船客を運んだ。金比羅大権現を中心に放射状に広がった丸亀街道・多度津街道・高松街道・阿波街道・伊予街道の5本の金比羅街道には多くの参詣者が往来したはずである。街道に奉納された金比羅灯籠や鳥居に、上方や西国の商人の名前が刻まれているのはそのなごりである。

信仰という意味では、貞享4年（1687）に宍弁真念が「四国遍礼道指南」を著し、遍路札所八十八カ所を定めたことによって、全国各地から多くの人々が四国遍路を訪れることになった。こうした人々もまた丸亀や多度津の港を使ったのである。こうした港の繁栄は、明治22年（1889）に讃岐鉄道が開通し、同30年に高松まで延長して、高松港が本州・四国を結ぶ玄関口となって以降、次第にかけりをみせるが、それまでは、港の周りには豪商の家が建ち並んでいた。

このような環境にあった近世の西讃地方では、人びとの意識は常に外に向けて働いていたといえ、団子馬はこうした風土に育まれたといえるかもしれない。

#### （1）西讃地方の団子馬製作の実態

本項では、現在、西讃地方で行われている団子馬製作の実態を、現地調査をもとに報告する。

### ①丸亀市内の団子馬製作

丸亀は、JR丸亀駅の南側には高台に丸亀城がそびえ立ち、北側には丸亀港が開けている。今も港に残る巨大な青銅の太助灯籠は、江戸の講中によって建立されたもので、かつての丸亀の栄華を伝えている。赤地に黒で○に金の字が染め抜かれた金比羅土産の団扇は丸亀の特産物であった。丸亀の象徴ともいえる団扇のミュージアムもこの港にある。しかし、駅から丸亀城に向かって延びた幾筋かの商店街はシャッターを閉めたままになっている店舗が多く、経済的に厳しい状況にある丸亀市の現在を物語る。

団子馬の由来譚として、丸亀生駒藩の馬術の名人・曲垣平九郎が、東京の愛宕山の石段を馬に乗ったまま上下した偉業を称えて始められたとか、崇徳上皇が保元の乱に敗れて讃岐の国に流されて来た時に、里人が上皇を慰めるために団子馬を作って以来であるとか諸説あるが、どの節も真偽の程は確認できない。

#### 【事例1】やまわき菓子舗 山脇智氏（昭和10年生まれ）・政子氏（昭和15年生まれ）

山脇智氏は、平成16年まで駅の南側の西平山町でやまわき菓子舗を営み、団子馬製作者として数々の出版物にも取り上げられてきた。

山脇氏は詫間町出身で、17歳から丸亀で6年菓子職人になるべく修行をした。このうち4年は各地で菓子技術を学び、神戸の風月堂では洋菓子作りも学んだそうである。山脇氏が菓子店を創業したのは40年前ほど前であった。その頃、丸亀市内には45軒ほどの菓子店があり、角を曲がると菓子屋があるというほどで、駅前も商店街も活気に溢れていた。

しかし、瀬戸大橋が開通したことで丸亀は本州への通過点となり、高知と香川とを結ぶ道路の開通とともに道路沿いに大型スーパーが出店したことで、駅周辺の小売店の景気は次第に悪くなり、菓子店は後継者不足も重なって、次々と店をたたんでいった。丸亀市内の人びとは、誰もがこんなに早く変わってしまうとは予想していなかったという。この傾向は丸亀だけではなく、観音寺なども同じ状態にある。

山脇氏の団子馬作りを始めたのは35年ほど前で、観音寺の菓子組合の先輩に教えてもらってからである。当時は、まだ丸亀にも3軒くらいは団子馬を作っている人がいた。御菓子処乃だやの主人・野田正教氏とは、この時一緒に団子馬作りを勉強したという。20人くらいが団子馬作りを習ったが、専門的に作ったのは山脇氏と野田氏くらいであった。両氏は兄弟のような付き合いで、団子馬の作り方も同じある。山脇氏は商売で団子馬を作り始めたころは、案内用の看板を自分で書いて、観音寺市・三野町・高瀬町まで貼りに行って、注文をもらったという。

現在、山脇氏は体力的な理由で菓子店を廃業したため、団子馬作りは行っていないが、5年ほど前、丸亀市菓子工業組合に加入する菓子店8軒が集まり、そのうち5軒が山脇氏の指導で団子馬を作っているという。

山脇氏に馬節供のことをうかがうと、これは西讃地方独特の習俗で、旧暦8月1日の八朔の祝いで、男児の節供であるという。5月5日の端午の節供にも男児の祝いはするが、8月1日にも行うのである。団子馬は母方の実家から持ってくるのが一般的で、かつては母方の祖父が、頼んで作ってもらっ

た団子馬をリヤカーで運んだものだという。団子馬は外から見える6～8畳の部屋に飾り、背面には家紋入りの幕をかけ、段飾りには武者人形、松や竹をおき、下には張子の虎を置く。張子の虎は団子馬には付きもので、仁尾町で作られた虎を玩具店で買ったものだが、岡山にも張子の虎を作っているところがあった。山脇氏は子どもの頃、この虎が怖かったというが、今でも大きな張子の虎の首が上下すると泣く子どもがあるという。

団子馬の始まりは、伝承によれば、丸亀城築城の400年前に遡り、城主の嫡男誕生を祝って、近隣の百姓が献上したという。当時は士農工商の世で、武士は人びとの憧れであり、団子馬を一般の家でも飾るようになったのは、こうした人にあやかり、子どもが出世するようという意識が働いたのではないかという。また、馬の名人である曲垣平九郎の出世物語が庶民の心をとらえたのではないかもいう。

団子馬を飾るのは、男児が生まれた年の旧暦の八朔だが、近年は3歳まで、長い人では7歳まで飾る人もあるという。近年は、団子馬を5月5日や孫の誕生日に注文する人もいる。同居していない子や孫のため、里帰りの時にお祝いをするからであるという。

山脇氏が団子馬作りに着手する以前は、団子馬作りを得意としている年配者が、人とは違う形の馬を作ろうと競った場合もあり、この時期は家ごとに馬の形が違った。また、農家では、自分で作った米を用いて団子馬を作っていたようで、近所のおじいさんやおばあさんが作る場合は、馬というよりも豚や牛のような姿のものもあった。団子が余るともったいないので、団子をすべて馬台につけることになるので、太った馬になってしまうのだという。

また、琴平の農家の人が、市内の道ばたでゴザ（敷物）を敷いて団子馬作りの実演をしながら売っていたこともあるという。この時、団子だけは専門の人が練っていたが、馬の形にするのは、農家の人が行って、色を付け着飾って仕上げた馬を馬台ごと売っていた。この馬台は、団子馬の骨格にあたるもので、野鍛冶の人が作っていたようである。台座の板の上に、馬の後ろ足が刺さり、その上に筒状の木でできた馬の胴体がついている。胴の前側に嘶いている馬を表現するように、立ち上がった前足の金具が付き、首にあたる金具も出ている。台座にあたる板は、檜をはじめいろんな木が使われていた。単に四角の板ではなく、瓢箪型にしたものもあった。馬の頭と脚にあたる鉄の部分は、野鍛冶で曲げて成形していた。

山脇氏が団子馬の注文を受けていた頃は、購入すれば馬の台だけでも13,000円ほどはするので、過去に農家の人から買った団子馬の馬台が家の納戸に残っていれば、それを孫のために再利用することを勧め、台がぼろぼろになっているものは山脇氏が修理して使ったこともあったという。

団子馬を用意した家では、「お客をする」といって、親戚や近所の人たちを呼んで、祝いの膳を囲むこともあった。



丸亀市内の馬節供飾り（年代未詳）  
写真提供：丸亀市立資料館

団子馬の材料は、団子と砂糖で、この他に必要なものは、馬台、ヘラ、割り箸、タテガミ、尻尾、食紅、目、帯締め、兵児帯、たらし、帯揚、口金などである。

道具は自分で作っていて、ヘラの竹は茶色くなって形が変わらなくなった竹を用いる。このヘラは、歯の筋をつけたり、口を開けたりするときを使う。この他にも鼻の穴を開けたり、たてがみを埋める穴を開けたりするために使う棒もある。

馬の大きさは1斗馬、5升馬などがあり、それぞれ3～4万、2万くらいする。団子の量で大きさが異なり、5升であれば馬の高さは80<sup>センチ</sup>、1斗で1<sup>メートル</sup>程度になる。主に注文を受けたのは、5升馬であった。

一度に作ることができる団子馬の生地は、米粉9割・糯粉1割にしたものが4<sup>キログラム</sup>分で、ここに水を適宜入れてミキサー（混合機）で練る。米粉が一番細かいものを用い、糯米を混ぜて粘りを出すようにする。頃合いを見てミキサーを止め、両手の中に入るくらい大きさにちぎった生地をセイロに並べ、約30分蒸す。生地を小さくして蒸すのは、蒸気が当たりやすくなるようにするためである。このとき、蒸し過ぎると生地に腰がなくなり、蒸し不足だと伸びが悪くなるので、蒸し加減は馬の出来具合を大きく左右する。

蒸しあがった生地を再びミキサーに入れて練る。途中で一度止めて砂糖を加える。砂糖は生地に対して約10<sup>パーセント</sup>の分量で入れる。砂糖を入れる理由は、食べた時においしい、練り上がった時に艶が出る、そして日持ちが良くなることである。砂糖を加えた生地をさらに練る。どのくらい練るのかは経験で、ミキサーを止めるタイミングを見過ごさないよう、練っている間はそこから離れない。

馬の頭部になる部分の生地を量る。一番小さい団子馬は2升馬で、その時の馬の頭は2,200<sup>グラム</sup>である。1升増えるごとに1,100<sup>グラム</sup>ずつ増やす。残りの生地は冷やすと固くなるので、湯煎しておく。

頭の部分は、生地を捏ね、整形しやすいよう円柱型にしておく。馬台の頭の金具の部分にこの頭部の生地の固まりを刺し、まずは胴まで伸ばす。団子が柔らかい間に伸ばしてゆくが、温かい馬は首が垂れて横を向くことがあるので、一から作り直すこともある。大きな馬の場合、土台（芯になる鉄の部分）が頑丈にできていないと、横を向いてしまうようなことになってしまうそうである。

生地を伸ばす時は、生地が手につかないよう、手を濡らしておかなければならない。濡らし過ぎると生地が滑ってしまうので、餅つきの手水のような具合にする。伸ばす時は、暑い時期なので、かなりの重労働となる。

さらに団子を下に伸ばし、前足の部分の金具に沿って左右均等になるように団子を伸ばす。これも、長年の勤であるが、足の部分が足りなくなったら、湯煎にしてある団子から継ぎ足すこともある。団子を伸ばす時は、出来上がりを想定しながら、指先だけでなく体全体を使うと、馬に動きが出て来る。

肩の辺りに団子を握りながら筋肉を作って馬のたくましさを出し、首を前に出すようにして頭を整形する。

頭が出来たら、ヘラで馬の口になる部分に切れ目を入れる。その口の中に割り箸を刺し、頭が落ちてこないように固定する。割り箸はあまり刺し過ぎず、口と同じくらいの深さまで入れる。

鼻の部分になるところに、棒で穴を開けた後、指で鼻を広げ、全体を整える。そこまでの成形は、

熱のあるうちに行い、成形し終わったらだれないように、素早くあら熱をとる必要がある。八朔は残暑の厳しい頃なので、クーラーを効かせた部屋で4、5台の扇風機を回して熱をとる。乾かすことによって、表面が引き締まるのだという。

次に、湯煎しておいた尾部になる部分の生地を量る。2升馬では1,400グラムで、1升大きくなるごとに700グラムずつ増やす。生地を捏ねたら、尾に近い腰の部分に少し団子をのせ、さらにその上に固まりをのせ、足の部分に向かって伸ばす。足先まで生地を伸ばしたら、蹄をつける。蹄は別の生地の形を整えながら伸ばすようにしてつける。この量はやはり勘である。馬台の木の胴の部分には帯を巻くので、団子は置かない。

タテガミと尻尾には、シュロを漂白したものをつける。団子が柔らかい間に穴をあけて差し込む。この時、シュロの差し込む部分を水で少し湿らせておくと差し込みやすい。一番上のタテガミと尻尾は立てるようにして差す。他の店ではタテガミの数は4つだが、山脇氏は縁起物なので5束にしている。タテガミの長さは職人の感性なので特に決まりはない。

目の縁と歯、舌を作ってつける。これらは政子氏がつけるときもある。目の縁は小判型に捏ねた生地を押し潰したものをつけ、歯は団子の生地で、2升馬なら直径約5ミリの円柱を作り、転がしながら成形して、八等分の間隔に切れ目を入れて歯にする。歯の大きさは馬の大きさによって変わる。耳は耳型に捏ねた生地に楊枝でつけ、耳の中の部分を赤で着色してから頭に刺す。

ここまで成形したら、政子氏が馬の形を確認し、山脇氏が修正する。ここからは、政子氏が担当する。

団子は6時間くらいで冷えるので、冷えたら彩色し、胴に帯を巻き、ガラスの目を着ける。彩色には食紅を用いる。色は薄めにして、食べる時に不快感を与えないようにしている。下あごや鼻の周り、蹄は緑色で塗り、歯ぐきと鼻の穴、目の縁を赤色で、最後に歯を黄色で塗る。食紅が垂れないよう手早く塗る。

目は血走った馬の目を表現するので、赤いガラス玉に針金が着いたものを用いる。昔は透明のガラス玉の中に赤い糸、そして綿を詰めて作った。目を入れると、馬に命が吹き込まれ、団子馬から馬になると政子氏は言う。目の大きさも馬の大きさによって違う。

団子のついていない胴の部分には、帯飾りをする前に、新聞紙を柔らかくしたものに包装紙を重ねたものを巻きつける。そして帯を巻く。この帯は、お嫁さんやお祖母さん、孫の帯など家族の使ったものを持ってきてもらう。昔は正絹の豪華なものもあったという。

次に、馬の首と尻尾に帯び締めを通して結ぶ。結び方に決まりはないという。そして兵児帯を巻く。三つ折りにして、蝶々結びにするのにちょうど良い長さまで巻いたら結ぶ。さらに、帯の後ろに垂らす「タラシ」も巻く。これも三つ折りにして、馬の下から上に回し、何度か巻きつけて上でくくり、馬台につかない程度で垂らすようにする。

帯揚げは手綱にする。左右それぞれの轡用の口金に糸を繋ぎ、糸を口の中にかます。帯揚げの両端は轡用の口金に糸でくくりつけ、帯揚げを馬の腰の上に置く。これで団子馬は完成する。

団子馬の他に、マエカザリも作る。これは、鶴、亀、鯛などである。亀は海亀なので、ワカメ（海藻）が体についているように彩色する。色付けには、茶色は食紅、緑色は抹茶を用い、これらを団子



丸亀市内の馬節供飾り（年代未詳）  
写真提供：丸亀市立資料館

に練り込んで作る。鯛の体は霧吹きで食紅を吹いてほかすようにする。鱗や甲羅はヘラで形作る。山脇氏はこうした作り方は親方が作っていたのを見ながら学んだという。

かつて家々で団子馬を作っていた時代は、マエカザリはキュウリやナスなどであった。家に職人さんが来て団子馬を作ってくれた場合、余った団子で子どもにマエカザリを作らせたのだという。これらには、海の幸や山の幸という意味があったのではないかと山脇氏は言う。

タテガミや尻尾に使うシュロや目玉のガラス、轡の口金は、神功皇后などの八朔人形を売る玩具店で購入していた。山脇氏は丸亀に戦前からあったユイ商事で購入していた。現在はこうした道具は手に入りにくくなったので、団子馬を崩したら返却してもらっているという。

団子馬製作には1頭につき1時間くらいかかる。団子馬を納めるのは8月1日だが、多いときは100頭の注文があり、手作りなので1日ではできない。セイロを5段くらいにして生地を蒸し続けても、1日20頭くらいしか作れない。団子馬の他にマエカザリも作るので、忙しい時は米粉に水を入れるといった下作業を手伝う人を頼んでいたが、とても手がまわらなかった。そのため8月1日を挟んで、前後10日くらいにお客さんの注文を振り分けるようにし、祝い事なので、午前中に届けるようにしていた。団子馬ができあがるまでに、お客さんには台の修理や帯の相談などで3～5回は店に来てもらったという。

子どもに恵まれない人は、団子馬の性器を食べると子宝に恵まれるという俗信がある。地域によっては、耳や蹄の部分を食べると良いと言われているという。子どものいない親戚にあげる人もいたが、その後、子どもができたという話を何度も聞いたという。

団子馬は3日くらいでひび割れてくるので、あとは解体して近所に配る。これを焼くと芳ばしくておいしいが、砂糖を入れてあるのでさらにおいしさが増すという。

山脇氏は、団子馬の形は馬が嘶く勇ましい姿を基本にしている。良い馬はバランスの良いもので、首が長く伸び、足や腹の筋肉ができているものである。馬の肩から首、頭にかけての成形が、もっとも難しいところであるという。また、芯になる金具のどこに団子を置くかで出来の良さが変わってくるともいい、同じ1斗の生地でも、人によって高さが1尺になったり80分になったりすることもある。

馬台は取引していた鍛冶屋に頼んで作ってもらったそうである。かつて団子馬を作る家には、お腹を棒で支えて両脚が宙に浮いているトビウマという馬の形をはじめ、さまざまな骨組みがあった。他の人とは違う馬を作りたいという人が、その骨組みを作ってもらっていたからである。しかし、山脇氏は売り物として団子馬を作っていたので、同じ形になるように心がけており、毎年100頭も作っていると、馬の形は決まって来るという。

坂出には団子馬を化学綿で作っていた女性がいた。とても上手くできていたが、近年は作っていないようである。化学綿の馬は、静電気で埃がつきやすく灰色になってしまうことがある。かつてはユニ商事でも布で出来た小さな馬を売っていたという。

団子馬を食べる日はヤイト（灸）をすえる日でもあった。山脇氏も子どもの頃、団子馬を食べた日に母親から背中に灸を据えられた。「食べたらすえるもんだ」といって、動かないようにと山脇氏の背中に母親がのって、艾を盛って線香で火をつけた。艾は小さくはしてくれていてもやはり熱いものであった。「痛い」と叫んでも母親は「もうちょっと、もうちょっと」といってすぐにはやめてくれなかったが、子どもを思う親心からであると感じたそうである。

昭和40年頃、多度津町の道隆寺の近くには、疝の虫封じのために点をおろしてくれるところがあった。点をおろすとは、その場でヤイトをして跡をつけてくれることで、これが家ですえる時の印になった。ここでは疝の強い子どもに点を下ろした後、鹽にぬるま湯を入れて行水させる。点をおろしてくれた人は、子ども出た後の鹽の水を松葉でかき混ぜ、松葉に白い糸のようなものついていると言って「これが疝の虫だ」と見せてくれるが、親の目には何も見えなかったという話も聞いたという。

なお、山脇氏の団子馬製作に関しては、濱本一平氏がくらしき作陽大学に提出した卒業論文「香川の祝い菓子－八朔のだんご馬－」も参考にさせていただいた。

## 【事例2】御菓子処乃だや 野田正教氏（昭和14年生まれ）・正氏（昭和43年生まれ）

平成21年（2001）は9月18日が旧暦の八朔であった。当日、山脇氏とともに団子馬作りを学んだという野田氏に、店舗の奥にある厨房で団子馬製作の実際を見学させていただいた。

当日、乃だやでは20頭ほど団子馬を作るということで、朝6時から家族総出で団子馬作りに取り組む様子は圧巻であった。団子馬作りには体力がいるので、現在では正教氏の後継者である正氏が主体となって製作を行っている。正氏は、山脇氏からも団子馬作りの伝授を受けたという。

団子馬の生地は、頭の部分に6割、尻の部分に4割を使う。生地には艶が出るよう、また伸びが良くなるよう砂糖を少し入れている。団子のキメ（肌理）が良いことが、団子馬作りに欠かせないことである。生地が柔らかい間に成形するので、掌に感じる熱さは相当なものである。練り上がった団子を少し食べさせていただいたが、ほんのりと甘く、米粉の馥郁<sup>ふくいく</sup>とした香りが口の中に広がった。

足の部分を作っていた正氏に成形上の留意点をうかがうと、団子馬の芯になる鉄の部分が見えないようにすることや左右の足の太さが揃うようにすることなどがあるという。

仕上がった団子馬に装飾をするのは女性たちの仕事で、胴巻きを使うのは、帯締め2本（首）、タラシ2本、兵児帯2本である。これらはお客さんの家から持ってきてもらうそうである

団子馬とともに団子の鯛作りも見せていただいた。色はスプレーで食紅を吹き付けるが、鱗の前から吹き付けることで、鱗が際立つという。

## 【事例3】丸亀駅前での実演 岡雅久氏（昭和25年生まれ・綾歌町在住）

丸亀の団子馬が一般的に良く知られるようになったのは、八朔の朝、JR丸亀駅前で行われた団子馬製作の実演と展示が行われ、この様子がテレビニュースで毎年流されるためではなかろうか。

この実演が、丸亀市観光協会の主催で行われるようになってからは、平成21年で10回目となる。実演は、協会から市内の中野餅店に依頼し、中野餅店の先々代からつきあいのある岡雅久氏が、さらに依頼を受けて行っているという。

旧暦八朔当日（平成21年9月18日）、岡氏は7時くらいから駅構内に設置された台で、次々に団子馬を完成させてゆく。団子の生地は、中野餅店が粉から用意し、練り上げたものである。岡氏の実演は8時半頃にはほぼ終わり、通勤や通学のため、駅を使う人々が足を止めて実演を眺める。出来上がったばかりの団子馬は、張子の虎や昭和20年代の馬節供の写真パネルなどとともに駅構内に展示され、9時からはその横でセレモニーが行われた。丸亀市観光協会長や市の健康福祉部長、JR丸亀駅長の挨拶のあと、岡氏から団子馬についての説明があり、最後に見学に来ていた丸亀市立塩屋保育園の園児29名が歌を歌って閉会となった。9月23日までの6日間、この団子馬は展示された。

団子馬の実演は、駅構内での実演が固定化する以前は丸亀城で行ったこともあるという。岡氏が実演をはじめてから、20年ほどたつ。それ以前は、団子馬を趣味で作っていた父・政数氏（大正14年生まれ）と、岡氏の団子馬の先生でもある金井氏とが実演を行っていたが、二人が亡くなったため、現在は岡氏がそれを引き継いだ。岡氏は17歳くらいから団子馬を作るようになったが、本業は大工である金井氏から団子馬製作技術を学んだ。中野餅店の中野善子氏（昭和18年生まれ）によれば、この金井氏はとにかく手先が器用な人で、中野餅店で団子馬の注文を受けていたころは、この人に依頼していたそうである。

駅の実演では、1斗馬1頭、3升馬2頭が作られたが、3升の馬には赤米と黒米が使われた。黒い馬は3年前ほど前に宇多津町が町おこしのために古代米を作り出したので、これを使って作るようになったそうである。今年は赤米を初めて団子馬を使ってみたが、生地作りが難しいという。黒米や赤米は粘りがなくまとまりにくいので、糯米と合わせて良く練り込みをしてから団子馬が作れるような生地にするそうである。岡氏は、団子馬は団子のキメ（肌理）が大切で、馬の形は首を細くして伸ばすのが正式であるという。

## ②仲多度郡琴平町の団子馬製作

丸亀での調査で、かつて丸亀駅前では、琴平町の農家の人が団子馬を実演しながら売っていたことを聞いた。現在、琴平町で団子馬製作はどのように継承されているのかを確認するため、琴平町を訪れた。手がかりを探して琴平町教育委員会を訪ねたところ、大西真理代氏から、息子の馬節供の時に団子馬を作ってもらったという琴平町苗田の花岡満氏を紹介していただいた。

大西氏の話では、団子馬は初節供の時だけに飾るものだが、子ども本人は生まれただけで何もわからないため、2年目も作って飾ったそうである。この団子を食べると病気をしないといわれており、近所に配ったところ、70歳以上の人にとっても喜ばれたという。

なお、琴平町の東条菓子店では、近年は注文を受け、団子馬を作っていることを確認した。

### 【事例1】琴平町<sup>のうだ</sup>苗田 花岡満氏（昭和13年生まれ）・十四子氏（昭和14年生まれ）

苗田は善通寺市に隣接する場所に位置し、金倉川がその境界となっている。昭和38年までは、琴平

から多度津を結ぶ琴参電車がこの家のすぐ近くを走っていた。琴参電車は、当時、繁華街であった善通寺の赤門前にも停車した。十四子氏の出身地は琴南町だが、10代後半から20代にかけては、琴平からこの電車を使って善通寺に行くことが多かったという。

苗田は近世には苗田村であり、満濃池を維持するための那珂郡池御領に属する農村で、現在も農業を営む家が多く、ニンニクは主要な作物である。花岡家も満氏の父親の代までは専業農家であった。現在、満氏は自宅の周辺に広がる田畑で、家で食べる米や野菜は作っている。畑に立つと象頭山の稜線を眺めることができる。

花岡家の位牌を見ると、文政6年（1823）のものが確認でき、近世後期には確実にこの地に根を下ろしていた家であることがわかる。花岡家の周囲には本家分家が点在し、花岡姓の家が多いため、それぞれの家を屋号で区別している。満氏の家の屋号は「ナカヤ」で、鍬など農作業で使う道具には、〇に「中」の字が刻印されている。

花岡家では、昭和4年に74歳で亡くなった満氏の祖父・佐藤治氏は、確実に団子馬を作っていた。佐藤治氏は、金比羅参詣の人々で賑わっていたころ、大きな旅館に呼ばれて馬を作りに行ったこともあったという。こうした旅館では、8畳間2部屋分を使って節供飾りをするところもあった。部屋の中に石をひいて川に見立て、そこに作り物の鯉などを飾ったり、本物の松や竹を置いて、竹から張子の虎が出ているようにしたりするなど、かなり大掛かりなものであったという。

昭和50年に65歳で亡くなった父・武市氏は兄弟とともに、熱心に団子馬製作をしていた。馬節供の時期になると、3日間で50～60頭の団子馬を作っていたという。郵便局員をしていた叔父の西上勝義氏（故人）も琴平町では馬作り名人として知られ、いろいろな人に団子馬の作り方を教えていた。

満氏は、生きている馬を見て作っているわけではなく、父親の作っている様子を見ながら団子馬作りを学んだ。満氏が団子馬を作り始めたのは、父の武市氏が亡くなってからで、35年ほどが経つ。父が生きている時には、お金を貰って作るものだからと、団子馬には触らせてもらえなかったという。年に一度のことなので、1頭目の馬の時にはなかなか手が慣れないが、次第に手が慣れ、調子が上がってきたころには終わってしまうという。

八朔が近づくと、満氏の同級生や、かつて野球や卓球を教えていた子どもたちが団子馬作りを手伝うために集まってくれる。いつもはこうした手伝いの人を合わせて7人ほどで作っていた。

何頭も作る時は、団子を茹でる鍋やガス台を出すなど、準備にも時間がかかるため、満氏の妻の十四子氏は、朝3時くらいから支度をしていたが、近年は団子馬を注文する人も減ってきたという。馬の値段はいくらとは言わないが、6升馬であれば3万円ほど祝儀をもらうそうである。

平成21年は、満氏の足に痛みがあり、力が必要な団子馬作りには無理がきかない状態だったので、6升の団子馬2頭しか注文を受けなかった。そのため、崎貴三氏（昭和16年生まれ）だけが手伝いに訪れていた。団子馬を注文するのは、近所の人や丸亀、多度津町の人で、特に宣伝はしないが、人の口を通じて注文が来るそうである。

花岡家の物置には、台（馬の台）が何台も残っている。この中には祖父の代からのものもあるという。使っている木は松ではないかと思うがはっきりとはわからない。この台も自家製で、鉄の部分は鉄工所に行って作ったという。台は金物屋でも販売していたが、売り物の台では思ったような馬がで

きないので、家で作っていたようである。台にはハネウマ用とトビウマ用があり、前足を上げて嘶くタイプがハネウマで、馬が空を飛ぶ形態をもつのがトビウマである。台は八朔が終われば返却してもらおうことになっているが、小さな台は帰ってこないことが多く、無くなってしまったという。

団子馬の材料は、6升馬なら、5升が米粉、1升が糯粉で、砂糖は入れない。6升の生地のうち、頭の部分に3升、尻の部分に2升を使い、残りの1升は鯛を作るためのもので、生地が足りなくなつて継ぎ足す場合もここから使う。

米は花岡家で収穫したものを使っている。団子馬作りを継承するのに問題があるとすれば、米を粉に碾いてくれる場所が無くなってきたことがあるという。石臼は目立てをする職人がいないなどの理由で使えない。今はあるお米屋さんに頼み込んで碾いてもらっているが、そこが無くなったら今後はどうするか考えなければならない。

馬を成形する前の作業は、すべて庭で行う。プラスチック製の大きな桶に米粉と糯粉を入れ、柄杓に3杯程度の水を徐々に入れながら練る。これは十四子氏の仕事で、頃合いをみて練るのをやめ、生地を直径10<sup>cm</sup>程度の平たい円形にしてゆく。

庭に置かれた大型のガスコンロの上に鍋をのせ、鍋の湯が沸いたら、団子の生地を茹でる。半分に割って中が透明になっていれば茹で上がりの印である。茹で上がったなら網ですくい上げ、コンロの横に置いた石臼の中に入れる。そのまますぐに杵で団子を搗き、搗き上がったなら、臼の中でなじませ、ひとかたまりにして臼から下ろす。

この後の作業は、いつもは家の中で行う。廊下に正月の申し餅を作る時にも使う板を置き、この上で団子を成形する。今回は縁側部分にこれを置き、満氏の足に負担がかからないよう、満氏は外に立った状態で団子を捏ねる。機械は使わず、すべてが手作業なので、相当の力が必要に見えた。

まずは頭の部分から作る。これは頭から作った方が作りやすいのだという。団子の生地の固まり3升分を板の上で練って、細長いプリンのような形にしたなら、いよいよ台にこれを付ける。台は家の中に置かれ、花岡氏と崎氏が二人で作業をする。頭の部分の鉄棒部分に先の生地を差し込み、首、前足の方向に引っ張ってゆく。菓子店で使う粉は細かいものなので伸びが良いが、それに比べると碾いてもらっている粉は粒子が粗いので、伸びは十分とはいえないという。そのため、足の膝下くらいで団子が足りなくなることもある。この時は、1升分の生地から少し取って継ぎ足す。もともとの団子の下に継ぎ足した部分を入れて伸ばし、継ぎ目が目立たないようにする。

生地が温かいうちは、首が下がって頭が曲がってしまうので、そうならないように調整しながら形が落ち着くまで注意する。芯まで固くなるには時間がかかるが、馬が乾くと割れてしまうので、暑い日も扇風機は回せない。

この間に、十四子氏は、団子に食紅で桃色と緑色をまぜて練り、歯ぐきと舌になる生地を作る。ここからは道具を使って顔の部分を仕上げる。道具も家で作ったものを使う。馬の口の部分を三等分に割り、その間に桃色の生地の部分を埋めてゆく。これが歯ぐきと舌になり、舌は出しているように見せる。白い生地の部分に縦に筋を入れて歯にする。歯の数は決まっていない。

鼻の部分に道具で丸い穴を開け、指で縦長にして馬の鼻のようにする。

目は位置決めが難しいという。6升まではモクロクジュという樹の黒い実を使うが、それ以上の大

きさになったら、ガラス玉の目を使う。ガラスの目・轡の金具は善通寺の荒物屋さんで買っていたが、現在は扱っていないようなので、馬を壊したら返してもらっている。

続いて、腰の部分に2升の生地をのせ、尻から後ろ足の方向に引っ張ってゆく。手に水をつけながら、馬の筋肉が浮き出るように伸ばす。脚の後ろ側は、少し出っ張りがあるようにする。男児の節供なので、馬は雄馬である。

馬の耳の形を作り、爪楊枝をつけて、頭部に差し込み、タテガミと尻尾を付ける。タテガミと尻尾の素材はよくわからないが、神事で使うもので、2、3日前に束ねて準備しておく。今でも購入できるため、返してはもらっていない。

ここまで成形できたら、すぐに色を付ける。彩色は十四子が行う。眼のまわりを赤、蹄の部分を緑に手早く塗る。

最後に帯を着ける。この帯は花岡家で用意する。轡の金具に手綱の帯揚げを水引で結ぶ。昔は金毘羅さんの参道近くには花柳界があり、この女性たちが使う元結で縛っていた。

この間に満氏は鯛を作る。体の部分は手で成形するが、鯛の鱗や背びれなどは道具で形作る。かつては桃や亀、鯉なども作っていたこともあった。出来上がった鯛に十四子氏が着色して完成となる。たくさん作る時はもっと急いで作るが、今回は2頭なので、比較的ゆっくりしたペースで作っていた。

20年ほど前は、満氏が初節供の子どものいる家に行って作ったこともあった。この時は団子をその家で用意してもらったが、米粉の量を事前に話していても、味が良くなるから糯粉を多めに入れる家があり、この時は団子が固まらず、生地が下に下がってきってしまうため形にならず、もう一度生地を作り直してもらったこともあるという。

## 【事例2】琴平町北野町 高岡信一氏（昭和4年生まれ）

高岡氏は、小学校から高等科2年まで、父親や親戚4人くらいで作った団子馬を売っていたという。サイズは大・中・小があり、値段は、10月10日の金比羅のお祭りに子どもが貰う遣いが1銭だった当時、10銭、15銭、20銭くらいだった。

頼まれればもっと大きなものも作った。父親は農業を営んではいなかったが、親戚は農家だった。どの農家でも作っていたわけではなく、器用な人でないとできなかった。

馬の土台は、八朔の1週間くらい前から、針金とかまぼこ板くらいの大きさの板を使って作った。この材料は購入した。300頭ほど作ったが、高さ20センチくらいの小サイズの馬が多かった。

団子馬を作り始めるのは2日前くらいからであった。米を白でひいて粉にし、これに水を混ぜて練った生地を使ったが、砂糖は入れなかった。2升から3升の生地は、庭で何段かになっていたセイロで蒸した。これは女性も手伝った。蒸し上がった団子を台につけていった。足からつけて、上に伸ばして上げていった。

使う道具はハサミ1つだった。アカウマとシロウマを作り、馬のポーズも、足をすべて下ろしたものと前足を上げたものを作った。

口の周りなどの色は、食紅を使い、赤、青、黄などの色をつけ、目も書いただけだった。タテガミは弁当を包むソエギ（薄い木の皮）を細かく裂いたものを作った。

帯のところにも団子は付いていて、ここに布を買ってきて切ったものを巻いた

売りに行く先は琴平の町内で、榎井より西側の地域だった。売り手も5、6人いた。餅を伸す四角い板に馬をのせ、上に風呂敷をかけ、ひとりで両側を持って「モチ人形いらんかな」といって売って歩いた。学校から帰ってから売りにいった記憶があるという。

この馬は比較的どの家でも買ってくれた。男児が生まれた家などとは関係なく、飾り物として買ってくれた人が多く、買った人は床の間などに飾っていた。1週間くらいでひび割れてくるので、割ってから焼いて、醤油や砂糖をつけて食べたり、近所の人にあげたりした。高岡氏の家では、五月人形とともに、比較的大きな団子馬を床の間に飾ったという。

18歳で海軍予科練として鹿児島に行った頃は、まだ団子馬を作っていたが、戦後は作らなかった。米がなかったからではなく、団子馬を飾る習俗そのものがなくなってきていたそうである。

### 【事例3】琴平町川東 石井保子氏（大正8年生まれ）、藤原伊勢子（大正5年生まれ）

昔は、琴平は金比羅参詣の人々で繁盛していた。高級旅館（講宿）である、虎屋・敷嶋屋・桜屋などの玄関には、華やかに馬節供の飾りがされていたので、友だちと揃って飾りを見に行った。その飾りは、高いところにお城が置かれ、松の木が植えられていた。白い砂で作った川には、置物のような鯉を置き、清正の人形なども置いてあった。

石井氏の娘である多田みきよ氏（60歳）が小学生の頃も、宿屋の玄関には、八朔飾りがされていた。それは、雛人形のような段飾りで、その下には、砂で川が流れているようにしてあった。脇には藪を拵え、張子の虎が置かれていた。

現在、こうした旅館はすべて廃業しているため、聞き書きをすることはできなかったが、近くの庄氏の家でもこうした飾りがあったと聞き、訪ねてみた。

### 【事例4】琴平町川東 庄智恵子氏（昭和14年生まれ）

智恵子氏のご主人・弘氏（故人）は、昭和6年生6月24日生まれであった。弘氏の初誕生の年の馬節供の写真をを見せていただいた。写真には、藪の中に討ち入りに出ようとする赤穂浪士たちの人形が並び、団子馬が何頭も置かれているのが見える。当時の豪華な節供飾りの様子をうかがうことができる。

## ③仲多度郡多度津町の団子馬

多度津町では団子馬製作の伝承者から聞き書きを行うことができなかったが、かつての団子馬の様子を確認した。

### 【事例1】多度津町立資料館 館長 川元紀恵氏

川元氏がまだ実家（多度津町内）にいた頃、川元氏の兄のために、農業を営んでいた叔父が米の粉を碾いて団子馬を作ってくれた。40年から45年ほど前のことで、町方では菓子屋で団子馬を作っており、商店街では団子馬を作りながら売っていたという。

団子馬の骨は角材でできていて、古い台を使いまわしていた。台の金具などは野鍛冶の人が作ったようである。タテガミには鼻緒の中に用いる「オウ」を使っていた。生まれた年の初節供では1斗馬だったが、その後は毎年小さなものを作ってくれた。子どもたちは、団子をもらって鶴と亀、鯛などをおのおの作り、これらも飾ったそうである。

馬を飾るときは「景色を作る」ようにしたという。昭和23年頃のことだが、床の間に鎧甲、神功皇后の人形、団子馬2頭を飾り、そこに笹や松なども置く。張子の虎は笹の下に置いた。

大きな商家では、義経と弁慶の人形、七つ道具を背負った弁慶の人形なども飾っていた。多度津の商店街では、表から見える座敷に人形を飾り付けていた。大きな商家は仲ノ町にあり、影山家や塩田家など、廻船問屋を営む家が多かったという。

すぐに馬から団子がはがれてくるので、これを炭火で焼いて食べた。団子を食べると男児ができるともいわれていたという。

団子を食べる時は、必ずヤイト（灸）をすえることになっていた。ヤイトは首の後ろ、腰の後ろにすえた。夏にお腹が冷えて痛くなった時、ヤイトをしてもらいと楽になったという。道隆寺の近くに点をおろす女性がいて、川元氏はこの人に点をおろしてもらったという。

多度津町では国鉄職員だった田中正夫氏（故人）が団子馬作りの名人として知られていた。資料館職員の行成恵氏の弟・海氏（昭和54年生まれ）の時も、帯や米の粉を持って行き、田中氏に団子馬をお願いしたという。

## 【事例2】多度津町葛原<sup>かずはら</sup> 福井修一氏

福井修一氏の父親である福井修氏は、大正2年（1913）に生まれ、平成20年（2008）96歳で亡くなった。修氏は、農業を営み、手先が器用で、近所の人に頼まれて団子馬を作っていた。1989年1月には、団子馬製作を記録にも残すことを目的に、家庭用ビデオで撮影も行っている。多度津町立資料館でこの映像を拝見したが、76歳ころの修氏は、手際よく団子馬を作りあげていた。馬の足の部分で団子が足りなくなると、団子の継ぎ目はもともとの団子の中に押し込んで継ぎ足し、継ぎ目を目立たなくするような工夫をしていた。団子馬作りに使う道具の竹のヘラなども修氏が自分で作っていた。

貸していただいた写真では、初節供を迎える子どものある家に修氏が出向いて団子馬を作った様子がうかがえる。出来上がった節供飾りには、修氏が作ったと思われる団子の鯉や恵比須が置かれている。

多度津町の馬節供については、鎌田輝男氏が父・茂市氏の書き残した「在郷風土記」をホームページで公開しており、香川県立図書館ではこれを製本化している。80年ほど前の多度津町の馬節供の様子が書かれていて興味深いので、ここに一部を紹介する。

今では、大体9月初旬に午節句がある。これは、その家に男の子が産れた年を初午（はつうま）と言い、大抵の家では、餅米を粉にして、こしきで蒸かし、少々固目にコネで臼で搗いた団子を作って、この団子で馬や、鯛や、その他、色々な細工ものを作る。そして、武者人形や、色々な人形、お城などを飾り立て、このだんご馬を適当な処へ飾る。そして、その子の前途を祝う一種の行事である。この行事は、西讃地方が最も盛んである。古老の話では、何んでも丸亀のお殿さ

んの時代、馬曲平九郎という馬達者の武士に、ゆかりがあるそうだという。この、団子馬作りにつき、亡父栄祐は特技を持っていた。節句前になると、近隣から、その馬作りを頼まれるのである。早いのは4～5日も前から、これに取り掛かる。蒸して、コネた団子は、手際よく見るうちに馬の頭となり、胴・足となり、目玉のガラスを入れたり、立髪・尻尾を植え込んで、衣装（女のしごきや、半襟など）を着けると、全く威勢よく、今にも駆け出すかと思う出来栄で、これは自他ともに、その傑作を賞めない人は無かった。特に碁盤乗の駒・瓢箪から出た駒などは高く評価されたもので、時には、一斗・二斗という大駒まで作っていた。普通は米二三升位のものである。

#### ④善通寺市の団子馬

市名の由来でもある善通寺は、四国八十八カ所第七十五番札所で知られ、江戸中期の『多度郡屏風浦善通寺之記』によれば、空海の父で、地元の豪族であった佐伯直田公から土地の寄進を受け、弘仁4年（813）に落成したと伝えられている。善通寺市内でも、昔はさかんに団子馬を作っていたが、近年作っている人は、ほとんどいないという。

##### 【事例1】善通寺市 細川泰幸氏（昭和8年生まれ）

善通寺市立郷土館には、綿で作った馬が展示されていた。ここで偶然出会った細川氏にかつての団子馬の様子をうかがった。

善通寺でも、昭和16年（1941）の太平洋戦争までは、家々で団子馬を作っていたが、戦後はこの風習も廃れてしまったという。それでも、細川氏の友人で、農家で大工もやっているという人は、20年ほど前、孫に団子馬を作ったそうである。細川氏も団子馬の台だけは、今でも本家の屋根裏にあるという。

善通寺には農家も多かったが、門前町でもあり、陸軍11師団がある軍町でもあった。昭和16年頃には、物資がなくなってきたので、団子馬は作れなくなったという。

団子馬を作るのは、農家の普通の男性であった。子どもの頃は「あそこのおっちゃんが団子馬を作っている」と聞くと友だちと見に行った。外から見える8畳の座敷に、青い萱で崖や谷を作って、米を敷いて川にして、そこに団子の鯉などを置いて飾っている家もあった。これは裕福な家の飾りだったかもしれないが、普通の家でも団子馬は飾っていた。ただし、細川氏の家ではとにかく長男を大事にしていて、団子馬も長男の時だけ飾り、次男以下は作ってもらえなかったそうである。昭和元年生まれだったこの兄は、戦争末期に召集され戦死したという。

##### 【事例2】善通寺市上吉田町 善通寺ベビーセンター（代表 大川節子氏）

善通寺の赤門前の商店街は、かつては多くの人で賑わっていた。この商店街の一角に、子ども服や玩具などを扱うベビーセンターがある。店舗の前のヨシズには「うま節供」「八朔人形」と書かれた紙が貼られていた。従業員の女性によれば、八朔には神功皇后の人形と張子の虎がつきものであるという。団子馬の代わりに綿の馬を置いていたこともあったが、最近では住宅事情が変わって、人

形よりも祝儀が欲しいという人も増えている。また、八朔は五月節供に同化しても来ているという。

この店では一昨年まで綿馬を扱っていた。綿馬は汚れず、何年も飾れる上に、値段も団子馬と変わらない。大・中・小の大きさがあって、それぞれ3万・2万・1万ぐらいで、団子馬の方が高いかもしれない。この綿馬も一昨年までは店に置いていたが、去年からは置いていないという。綿馬の作り手として、坂出の女性が良く知られているようだが、善通寺の男性にも作っている人がいた。男性と女性とでは、できあがる綿馬は違って、女性は見た目にも美しく優しい馬を作るが、男性はリアルで力強い馬を作る。

団子馬は家庭で作ることが多く、板の上に針金を固定した馬の台は、8年ほど前までは雑貨店売っていたが、ここ数年は扱っていないようだという。

そこで、近所にある雑貨店のミハラヤで、馬の台について聞いてみると、かつては1斗馬、8升馬、5升馬などの台を売っていたが、台を作る人がいなくなったので10年ほど前から販売していないという。台は職人が拵えたものを仕入れていたので、それなりに高価なもので、1斗馬で1万円くらいはしたと記憶しているという。奥さんがこの家に嫁いだころには、まだまだ馬台もたくさん置いてあり、団子馬の目玉や鯛の目なども扱っていたが、最後に台を売ったころには団子馬を作る人はほとんどいなくなっていた。

### ⑤三豊市仁尾町の八朔人形祭りと団子馬

三豊市仁尾町は、香川県の西部に位置している。かつては天然の良港である仁尾港から大阪へ物資が積み出され、町には多くの商店が並んで、買い物をする人で賑わったという。

仁尾町では、11年前から「仁尾八朔人形まつり」が開催されている。かつては仁尾町でも、家々では八朔に男児誕生を祝い、屋内の一角に舞台を設け、石・砂・苔・松などで山川溪谷のミニチュアを作り、その場面に武者人形を配して、古くから人々に知られている物語の名場面を再現するという風習があった。町内に伝統を誇る人形作りの業者が何軒かあったことが、この風習に影響しているといわれている。しかし、これも次第に廃れ、30年ほど前に途絶えていたが、平成10年に仁尾町商工会の有志が中心となって「仁尾八朔人形まつり」として復活した。平成21年は9月19日（土）から21日（月・祝日）の3日間開催された。

人形飾りは町内の20カ所で公開されていた。文化会館前からスタンプラリーの順番に沿って会場を回ると、神武天皇、NHK大河ドラマの「天地人」場面、安宅の関、神功皇后、弘法大師、弁慶と牛若丸、浦島太郎、桃太郎、地雷也、宇治川の先陣争い、鶴の恩返し、姉川の合戦などの場面が訪れた人々の目を楽しませる。

ほとんどの会場では、このための舞台が設置され、舞台の前には手すりが置かれている。白い布に油絵の具で描かれた背景が下がり、山の部分には蚊帳を敷いて竹を植え込み、川の部分には白い石を敷いて、溪谷の雰囲気を出している。そこにそれぞれの物語の主人公の人形や張子の虎、小ぶりの団子馬が飾られている。

この舞台は3日ぐらいで作りあげる。同窓生が「何年グループ」というようなチームを作り、このチームごとに舞台を担当するそうである。舞台の骨組みは、専門家に頼むようなことはなく、チーム

の中で資材もそろえて組み上げている。背景の油絵は、三カ所の油絵同好会で担当しており、竹は町内の若い人が山から伐り出してくる。人形は、町内に残っている人形店に注文する。仁尾町は、近世から人形作りが盛んで、関西方面から多くの人形師が移り住んだともいわれている。張子の虎は、仁尾の郷土玩具として知られ、町内在住の真鍋佳則氏（83歳）と三宅修氏（72歳）は、香川県から張子虎の伝統工芸士に認定されている。

仁尾町では昔は団子馬を各家で作り、床の間などに飾っていたが、現在では途絶えていた。過去には、丸亀の山脇智氏がこの人形まつりに団子馬を収めたときもあったが、今回は仁尾町で団子馬を作れる人のもとに有志20名ほどが集って団子馬を作り、人形飾りの舞台に花を添えていた。なお団子馬の他にも、胡粉を塗ったような色合いの樹脂製の白馬を飾っているところもあった。

仁尾城跡に建つ覚城院は高台にあり、ここには弘法大師が洞窟の中で修行する姿が作られていた。詫間電波工業専門学校が製作に協力したとある浦島太郎や桃太郎は、からくり仕掛けになっているため、多くの見物人が集まっていた。

なお、仁尾町では、八朔には雛人形も飾る習俗があり、この時も何軒もの玄関先で雛壇飾りがされているのを見ることができた。この習俗の由来は、伝承によれば、天正7年3月3日、長曾我部元親の侵攻を受け、当地を治めていた細川土佐守頼弘が自害したため、3月3日の雛祭りをやめ、八朔に雛祭りをするようになったという。

こうした舞台のほかで、筆者の目を引いたのは、ある個人宅の人形飾りである。この家の玄関には幔幕が下がり、間口いっぱい舞台が作られていた。ここに今年誕生したと思われる男児の名前が書かれた木札が立ち、一休さんの一場面が作られている。玄関の右側には大型の人形や張子の虎、団子馬が置かれている。さらには、玄関のすぐ左脇の部屋の廊下に、三蔵法師や孫悟空など、西遊記の一場面が作られ、背景には金屏風が立てられていた。山や谷のような景色は作られていないものの、仁尾の八朔飾りの原型を見たような気がした。

西讃各地で行った団子馬調査は以上のとおりであるが、団子馬の製作方法は、基本的には菓子職人が作る場合も一般の人が作る場合も大きな違いはなかった。これは、馬台の形状が一緒であることに拠るのかもしれない。馬台の台座は木で、ここに鉄の棒で足が取り付けられ、その上に丸い木の胴体があり、ここから前足と首の芯となる鉄の棒が出ている。これは両足をあげて嘶く馬の姿で、ハネウマと呼ばれる形であるが、この形状は、団子馬製作が菓子職人の手にゆだねられるようになってゆく過程で固定化されていったようである。

かつて、農家の人々が団子馬を作る場合は、他の人が作らないようなものを作ろうという意識が働いたといい、ハネウマの他にも両足を上げて宙に浮く姿のトビウマや後ろ足を跳ね上げたもの、両足とも上げずに草をはむものなど、さまざまな団子馬の様式があった。丸亀の山脇氏は、商品化として団子馬を製作する場合は、なるべく同じ形の団子馬を作るように心がけたという。注文する側がハネウマ形式の団子馬が正式な団子馬であると認識するようになったことによって、一般の団子馬の作り手たちもこれに倣うようになった結果、現在のような同一形式の団子馬が残ることになったのではなかろうか。

このことは、馬台の作り手の継承が団子馬の継承に大きな影響を与えているともいえる。かつては雑貨店でさかんに販売されていた馬台も、馬台を作る職人が亡くなってからは仕入れることができなくなったといい、古い馬台を修理しながら団子馬を作っている現状がある。

また、団子馬の継承には、地域ごとに認められた団子馬製作の名人が果たした役割が大きかったこともあげておきたい。団子馬はどこの家でも作っていたとはいうものの、昭和30年代以降は、それぞれの地域で団子馬作りの師匠のような人が現れ、指導者の役割を果たしている。この指導者の存在も同一形式の団子馬の分布の要因にあるのではなかろうか。ここにも、団子馬が形式化してゆく過程を見ることができる。

また、八朔飾りの形式も、西讃地方では大きく変わらない。かつては、玄関や座敷などに、溪谷のような景色を作って、ここに武者人形や団子馬を飾っていた。人の目にふれる場所にこうした大掛かりな飾り物を置くことは、農村ではなく主に商家で行われる形式である。西讃地方の多くは港町として栄え、豪商と呼ばれる人々も多く存在した。内情の豊かさをこうした見せ方で示したことは十分に考えられる。また、街道沿いの旅館などにおいては、金比羅参詣の人々の往来によって、外から来た人の視線を強く意識する環境が作りあげられたであろうし、大掛かりな飾りは広告効果もあったであろう。こうした風土が、ただ団子馬や人形を飾るだけではなく、「人の目を驚かす」大掛かりな八朔飾りへの創造性をはぐくんだといえよう。

こうした大掛かりな飾りがなぜ八朔に行われたのかについては、明確な説明がつけられないが、あえていうなら、八朔飾りの本来の意味は、新たに収穫された米粉で作られた団子馬にあり、豊作を予祝する意味をもっていたということだろうか。西讃地方の八朔飾りの基層にはこうした意味があったからこそ、上巳や端午の節供ではなく、八朔に団子馬を飾り、後に大掛かりな飾りが付随したと現時点では考えておく。

なお、仁尾町の人形飾りの方法は、西日本の地藏盆や地藏祭りに出される「造り物」の見せ方と良く似ており、造り物とモチーフが共通するものもある。西讃地方の八朔飾りは、造り物の分布とともに検討する必要もあるだろう。

## (2) 西讃地方の団子馬の歴史

前項では、西讃地方各地の団子馬に関する現地調査を報告したが、西讃地方の団子馬は、文献上はどこまで遡ることができるのだろうか。

讃岐国豊田郡和田浜村（現在の三豊市豊浜町）の豪農であった藤村家の年中行事を記録した文化12年（1818）の「讃岐藤村家年中行事録」には

八月 一 朔日 頼節句  
獅子駒 祝  
酒肴

此又世上有ふれにてよし 格別珍敷沢なる事無用<sup>9)</sup>。

とある。この獅子駒は団子馬に相当するものであるかどうかの詳細は不明である。

嘉永5年から6年（1852-3）にかけ、宇多津の阿比野家で記録されたとされる『阿比野家祭式

全』には、八朔に「しし駒団子」として、

男子出生ニテモ馬ハカざらす 男子無之候而も有無ニハカ、わらず吉米五合粉ニ引テ牛馬斗り作り 牛ハクラヲイ馬ハクラ俵三俵置 粉之余リニ而作物心次第第二作り 足付膳ニ乗テ座敷床ニのし付テかざり晩ニヲロシ祝事 前日ニ拵ヘテ一夜置テ翌朔日晚ニさけてアフリ祝フテクウ事<sup>10)</sup>

ここには、男児の有無に関係なく、団子で鞍をのせた牛や、鞍に俵をのせた馬、さらにあまった団子では「心次第」にさまざまな「作物」を作って足付きの膳にのせて床の間に飾ったとある。これは八朔の前夜に作り、八朔の夜に割いて、焼いて食べるという。秋山照子は「馬の鞍に置いた俵などからは農耕との強い関連がうかがえ、近づく稲刈を予祝する行事ともとれる。獅子駒のこのような慣習は、西讃地域に伝承される馬節句のより素朴な形態でありこれらの前段階の風習が推定できる」と述べている。

安政5年(1858)、丸亀藩主・京極高朗が、儒臣の巖村秩と加藤穀の願いを受け、那珂郡櫛梨神社の祠官秋山惟恭らに命じて作らせた『西讃府志』には「猪駒」とある。

<sup>ししこま</sup>猪駒 八月朔日、此日田実トテ男子ノアル家ニハ、米ノ粉ノ団子ニテ馬ヲ作りテ飾ル、是猪駒ト云、子生レテ初テナルハ、初馬トテ親キ人ナド招き、宴ナド設ケテ祝フモアリ、又三野豊田ノアタリニハ、雛祭リスルモアリ、又丸亀アタリノ町人ハ、船ヲ作りテ飾ルモアルナリ、又奴隷ヲ養ヘル家ニハ、今日ヨリ夜作(ヨナベ)ヲサシム<sup>11)</sup>

『西讃府志』によれば、八朔には、男児のある家では、団子で馬を作って飾ることになっており、これを猪駒と呼んでいる。特に生まれて初めての八朔は初馬といって、宴席を設けて子どもの親族などが祝う。また、三野豊田あたりでは、八朔に雛祭りをし、丸亀あたりの町人は、船を飾って飾るという。この内容から、猪駒は現在の団子馬と同一のものと見て良いのではなかろうか。また、仁尾町で行われている八朔の雛祭りも、すでにここには書かれており、現在では聞くことはできないが、丸亀では船を飾る町人があったことが記されている。

こうした文献から、西讃地方の団子馬はかつてはシシコマと呼称されていたことがうかがえる。『阿比野家祭式 全』の場合は、男児の有無に関係なく、お膳にのるほどの大きさの牛馬を作って飾るという素朴な行事だが、『西讃府志』の場合は、男児の誕生を祝うことが重視され、親しい人を招いて宴席を設けるという大がかりなものになっている。二つの史料の時間差は5年ほどであり、この差異が年代によるものとは判断しにくい。この点については別に考えることとすれば、近世の西讃地方の八朔では、男児の誕生や子どもの健やかな成長ではなく作物の豊作を予祝するタイプと、男児の誕生を祝うことに主眼を置き、家の外からも客を招いて祝うタイプという異なるタイプのシシコマがあったことを述べておきたい。

この項の最後に、大正期の西讃地方の馬節供を記す書冊を紹介しておく。大正7年の刊行の『多度津町史』には、馬節供のことが次のようにある。

今も郡内に於て男児ある家には、米の粉にて団子馬を作り、室内に樹石などを配置して山川を形造り、武者人形等を並べ飾る風習あり。之を馬節句とも云ふ。初めは丸き胴に短き首足を作りて猪駒など称せしが、今は胴とて木又は金にて骨格を組み、一、二升乃至一斗余の糯を以つて造り、鬣、尾、轡、手綱、腹帯等を着く。之を馬の衣裳と云ふ。男児生れて初めなるときは、初馬とて

親戚知友より糯馬或は忠孝武勇に秀てし人形等を贈り、初馬の家には奇麗に之を飾付け、贈り人を招きて酒宴を為す。之れ其の児の出世を祝ふなり。而して翌日其の馬を割きて配贈す。八朔に馬を飾るは、足利時代に此の日將軍家より 朝廷に御馬を献上するに習へりと云ひ。又 崇徳院当国に在らせ給ひし時、村姫院の無聊を慰めむと、団子を馬の形に造りて奉りしに起る。故に此の儀西讃に盛なりとも云ふ。馬飾りの事団子馬の腐敗すとて一時衰へしか、近来美しき人形を主として、今も盛に其の儀を行へり<sup>12)</sup>。

観音寺市の大正期の馬節供の様子が書かれたものも紹介しておく。これは観音寺中央公民館が刊行した『郷土の文化』に記載されたものである。市民が八朔の思い出を綴り、この時代の団子馬製作がいきいきと書かれているので、長文であるがそのまま掲載する。

#### 「少年時代八朔の思い出」

私の少年時代大正七・八年頃と言えば、もう半世紀以上も昔となりました。楽しかった旧八月一日八朔人形の事を思い出します。私は大野原の農家に生まれましたので、その付近の事を書くことにします。当時の農家の土間は、どこでも広くできていました。八朔が近づくと、まず広い土間に涼み台（三尺×六尺）を二台も三台も敷き詰め、その涼台に御座とか蓆を敷きます。野原より芝草の土が付いている物を沢山取ってきて、その芝草を奥を高く山に見立て積上げ、前を平に敷き詰めます。芝草で山や谷、野原や川等も造り、松や笹で繁みを造っていきます。木の沢山繁っている奥の方から虎が出て来ている様に見せます。その虎を加藤清正の人形が槍をかまえて向っている様に見せるのです。山の上では、足柄山の金時が獣を集めて相撲の稽古をしている風に飾りつけます。色々な人形を高い所から谷川附近や平野の所へうまく飾っていきます。当時の人形は現代の様に小型化し上品にできていない時代の事で、さも素人くさい人形で土俗的なにおいがぶんぷんとしていました。どの人形も大型にできていたようです。讃岐や阿波地方の方言では、人形のことを「でこ」とも言っていました。男の子の生れた初馬の家があると、村中の男の子も女の子も大人迄もが見に集ったものです。仲間同志「どこそこのでこは、ほんとうにきれいやぜ」と言って何度も見にいったものです。ダンゴ馬は、前足、後足、頭の部分は鉄ででき、胴体と台は木材でできている馬の型に、米ダンゴの蒸した物を上手にくっつけて造り上げて行きます。家によっては前足を高く上げている馬、後足をはね上げている馬等色々な型の馬がありました。身長はでき上がりが五十糎前後と思います。時には割箸を折って骨組にして小さなダンゴ馬を何頭も造り上げている家もありました。立髪や尾には麻が用いられていました。こうしてできた馬に派手なしぼりの帯を胴中に結びつけると素晴らしいダンゴ馬になったものです。その馬は前列に飾られました。沢山の人々に見てもらい、八朔が終るとダンゴ馬は適当に切り取られて隣近所へもおすそ分けをしました。そのダンゴを焼いて食ると仲々おいしい味がしたものです。現代の様にラジオ・テレビ、映画等何でも楽しむ事ができる時代ではなく何にもこれと言う娯楽のない時代の事ですからそれを見に行くのが何よりの楽しみでありました。集った子供達は子供なりにどこそこのが一番良かった、二番がどこ、三番がどこと言う風に子供なりに等級をつけて楽しんだものです。少年時代の八朔のおもかげが少しでも残っているだろうかと思って見るだけでもほのかな心地良い思い出がよみがえってきます<sup>13)</sup>。

### 「だんご馬」

子供の頃の初馬の思い出は近所の悪友どもと町中のだんご馬を見て廻り、どこのがきれいだそれよりどこ、と何べんとなく見て歩いたことです。初めて長男が生まれた家では初馬と云って旧盆が終った頃より親類や知人から色々の武者人形や「だんご馬」を贈られて祝ったものでした。殊に嫁の里よりは立派な神功皇后さんが脇侍を従えた人形と大きいだんご馬を贈って初孫の為に大いに祝ったものでした。子供のある家では孟蘭盆頃より一家で祝物の人形やだんご馬の飾り付けについて庭師等に頼んで、植木や庭石、砂・苔等を集め築山や谷・川・滝等を作り、その間に人形を配し一番前にはだんご馬を飾り立てその美しさを競いあったものでした。ある長者のお屋敷では、玄関脇の大広間全部に高価な人形を飾り立て、泉水を作り池には大きい緋鯉を泳がせ、まただんご馬の立派で大きい一俵馬（四斗）・一斗馬・五升馬・三升馬等種々雑多な馬を飾り立てたのには近郷近在の評判となり、当時は車のない時代だからぞろぞろ歩いて列を作って見物に行った事を今でも覚えています。私の父もだんご馬作りが好きで、長男が生まれた時（昭和初期）店を開いていたので、その陳列場を人形とだんご馬で飾った事がありました。馬節句前四、五日は、近所や知人に頼まれて夜昼通して馬作りをした事がありました。だんご馬作りも形が色々あって、前はね馬が一番多いが、後はね・草喰馬・千匹馬等がありました。それぞれの馬台に鉄で作った四本の足と頭となる骨格を胴となる木に打ち付けたものに、白米ともち米とを混ぜた粉を水でだんごに練って蒸し器で蒸し、温い間に布等にくるんでよく練って、一匹の馬の約六割を前部につけ足と頭を作り、残り四割を後足として手早く形造りをします。冷えてのびないもの、のびすぎてねずみや猫・兎等のようなものになって思うようにできないが、立髪や口輪を食用色素で色付をし女の帯締や腰紐で飾り立てると何とか馬らしくなるものです。旧八月朔日は馬節句、当日は祝物を戴いた親類や知人等を招き祝宴をして子供の健康と成長を祈りました。その後はお人形は「デコビツ」に格納し、だんご馬は近所や親類へ配り大いに祝ったものでした。当時の常食は殆んど麦と芋で粗食であり、おやつは煎り豆位でしたので、だんご馬のかけらは、子供の好物でした<sup>14)</sup>。

### （3）東讃地方の獅子駒

前項にもあげたように、西讃地方の団子馬については多くの文献で確認することができる。しかし、東讃地方の八朔習俗については、市町村史などに多少の記載がある程度で、中でも馬節供に関する記述は見られない。そのため、本項では高松市を中心に、東讃地方の八朔を文献から見てゆきたい。

近世の文献を探すまでには至らなかったが、まずは明治時代の新聞記事からその様子を探ってみた。

『四国新聞』の前身である『香川新報』は、明治22年4月10日に創刊された。香川県立図書館でマイクロ化された初期の『香川新報』から、可能な限り八朔に関する記事を探してみると、いくつかの興味深い内容がある。

○明治24年9月3日（旧暦8月2日）

八朔の獅子駒

昨三日ハ陰曆の八月朔日俗に八朔と称へて市中の男児持つ家甲所乙所には米の粉で作りたる獅子駒を派手に飾り立て楽しむなりし故か一昨夜より昨夜へ掛けては市内大通り辺ハ人の出却々に多く随分賑しきとなりき

この記事からは、明治24年には、高松市内の大通りでは、男児のいる家で団子の獅子駒が飾り立てられ、これを見るために多くの人々が町へ繰り出していたことがわかる。瀬戸内式気候の特色で、夕風のため夜が更けるまで蒸し暑い夏の夜には、獅子駒飾りを見ることは一つの楽しみでもあったであろう。残念ながら、この記事には、獅子駒がどのような形態をしたものであるかという具体的な記述はない。

○明治25年9月21日（旧暦8月朔日）

#### 獅子駒の入費三百円

今日は陰曆八月の朔日にして俗に八朔と称へ男児を持てる家居にては座敷に獅子駒を飾るの日なりとて当地杯にても例年夜分に至れば賑ふとなるが茲に多度津町会議員の小国茂吉方にては去る一日頃より此の獅子駒の準備に取係り兩三日漸く出来揚りたる由なるが開は実に目を驚すばかりの立派さにて見物人ハ昼夜引も切れずとか聞く処に依れば讃岐にては振古嘗てあらざるべしの評判なるが先ず大広間の中央に二間四方の泉水を仮造し其の他の物を飾り附けある由にて泉水に五十円、大人形には七十余円を費し悉皆の費用は殆んど三百円に達せしなりとす

この記事で取り上げられている多度津町は西讃地方であることから、「獅子駒」は団子馬のことであると思われる。準備に3日もかけ、大広間に泉水を作って飾る様子は、かつて見たことがない立派なものだったという。今回の西讃地方の調査で、団子馬を飾るときに蚊帳で作った山や砂で作った川に松や竹を植えるといった「景色をつくる」手法をとっていた事例を各地で聞いたが、この記事に依るなら、こうした豪華な飾り方は明治25年頃から行われるようになったことがうかがえる。獅子駒は派手に飾り立てるものではあったが、この時期にきて「目を驚かす」景色をとまなうようになったのである。

○明治25年9月22日（旧暦8月2日）

#### 八朔と市の商業

例年旧暦八月朔日は村落より祭りの買ひ物旁出かくるもの多く又市内のみにても獅子、駒等の団子細工に相当の金を費し之に用ふる縮緬、鹿の子等も多少売れる筈なるに本年ハ団子細工屋も鹿子屋も一向八朔のお陰にはあづからぬ様子なるが何故本年斯くは不景気なるかと云ふに屢記する如く村落は未だ収穫せざるが為め市内は八幡さんの祭典後にて小遣いの一寸切目なるに拠るとなりと

前日の21日の記事には、多度津町の獅子駒の飾りには300円かけたという景気の良い内容があったが、翌日の22日の記事では、高松市内の八朔にこうした様子は見られない。ここで注目されるのは、これまで高松市内の獅子駒がどのようなものかはっきりとはわからなかったが、ここに「獅子」と「駒」とが別のものであることが示されていることである。また、「団子細工屋」という専門店が存在したこともこの記事からわかる。獅子駒には、団子馬に帯揚げや帯を巻き付けたように、縮緬や鹿の子などの布で装飾されていることも彷彿とさせる。この他にも八朔は高松市内では経済効果が期待さ

れる日でもあったことがうかがえる。

○明治33年8月25日（旧暦8月朔日）

#### 獅子駒

今廿五日は八朔に相当せるを以て朔日来当市にて男児ある家々は例年の如く獅子駒の団子細工を店頭飾りたれば夜間は人出も多かりし

この年の記事は、明治24年の八朔の様子と基本的に変わらない。しかし、次の記事では東讃と西讃の八朔のあり方が異なることがはっきりと書かれている。

○明治36年9月22日

#### 西讃の八朔

高松以東の八朔は獅々と駒とを主として陳列し祝へども其の飾りは多くは温雅にして華美なるは甚だ多からず、之に反して綾歌郡坂出以西は端午の菖蒲人形を主とし鹿、駒を却とし飾らる、其の余りの華美なるは眼なれぬ人をして驚かしむるに足るものあり、五節句を祝ふ事の衰へ頽れて動もすれば其の跡を絶んずる今も尚ほ数百金を八朔の一行事に投するものありと昨日も坂出、宇多津、丸亀等の端々を通りつゝ見た所にて宇多津町久住泰三とやら云ふ家にては間口三間半奥行二間もあらんかと思はしき表の座敷に厳めしき城郭を築き其の内外に松樹を植へ込み城内には一個幾円と云へる武者人形を城外には白に栗毛、黒毛毛色様々の野馬、乗馬を或は放し或は繋きたる等約五六十頭もあるかと思受けられしか他の装飾之に副ひしは無論の事とて只之れのみにて数十円を費したるべく見へたり、斯れば親族知己を招きての宴会此の装飾に副ふべきものなるべければ数十円より百数十円を費すとなるべしと思はるゝソハ兎も角も八朔の事すら高松地方と丸亀地方とは斯くばかりの差別あり是等も東讃西讃と区分する一つの原因ならめと思はれたり

この記事では、高松以東で陳列している獅子や駒は華美なものではないが、西讃の飾りは「眼なれぬ人をして驚かしむる」ものとなっている。座敷には数十頭の馬の人形が配され、親戚や知人を招いての宴会も大層な費用をかけている。記事の中で紹介されている宇多津は、中世には四国管領・細川頼之が城を構えて栄え、近世には高松藩の米蔵が置かれた港町である。塩田で採取された塩が、近代までは町に豊かさをもたらしていた。

こうした記事を概観すると、明治期には、西讃のように派手な飾りではないが、東讃にも「獅子駒」と呼称される団子の馬を飾る習俗は存在したといえる。

近世の西讃地方では「獅子駒」に豊作を予祝するタイプと男児の誕生を祝うタイプがあった。しかし、新聞記事からは、東讃であれ西讃であれ、豊作を予祝するタイプは見出せず、八朔の行事の主旨は男児の節供に集約されている。このことは、明治期の香川県では、第1次産業中心の社会から第2次、第3次産業へと移行して行ったという背景があるのではなかろうか。

東讃でも西讃でも団子の「獅子駒」あるいは「獅子」と「駒」が飾られていたが、東讃では飾りが華美になってゆく気配はないのに対し、西讃では飾りが次第に豪華になり、中でも馬の飾りが存在感を増してゆくように思われる。記事で取り上げられているのは、西讃でも富裕層に見られる八朔飾りではあるが、少なくとも記事の中には東讃に同様の飾りは見られない。本節のはじめに、金比羅大権現への参詣者が押し寄せた西讃では、ここに暮らす人々の意識が、家の外にむけて強く放たれていた

のではなからうかと述べた。「人の目を驚かす」という西讃の八朔飾りは、こうした意識を具現化したものともいえ、ここには東讃と西讃の風土の差異があったと考えることもできる。

この他に、東讃と西讃の八朔飾りの差異には、それぞれの地方における新暦の受容の相違も考えられるのではなからうか。『香川新報』には、管見の限りではあるが、明治33年までは発行日の横の括弧内に旧暦の日付と干支が記載されているが、翌年からはこの併記が見られなくなっている。

小川直之は「明治改暦と年中行事—太陽暦受容の諸相—」の中で『香川新報』の中から明治20年から41年の間の旧暦に係る記事を抜粋した結果、次のような見解を述べている。

この時代においては、高松市内においても庶民生活は基本的には旧暦を基準にしていることは明らかである。正月、盆、八栗詣で、蛭子神社、出晴八坂神社など、地域社会共同の場面においても、家ごとの個別的な場面においても全体としては旧暦が基調になっていたのがうかがえる。(中略) このように庶民生活においては明治30年代も旧暦正月が基準になっていたが、明治32年2月11日の門松撤去の記事のように、警察権力などから次第に旧暦正月には圧力が加えられることがあったし、明治45年1月5日号を見ると、新聞の論調がそれ以前とは違い、新暦正月の宮中儀礼の記事や官公庁などの正月行事を多く掲載するようになっている<sup>15)</sup>。

明治以降の香川県では、行政機関の中樞が置かれた東讃と西讃では八朔のあり方に次第に差異が生じていったという可能性もある。

いずれにしても、本稿では、限られた記事の中から分析を試みたに過ぎない。今後の課題としては、『香川新報』からすべての八朔関係の記事を抽出し、さらなる検討を加える必要がある。

ところで、大正14年に刊行された宮武省三の『讃州高松叢誌』には、高松のシシコマの様子が書かれているが、『香川新報』の記事を補う記述が多々あるため、少々長いがここに紹介しておく。

八月朔日は「ししこま」と言つて男の子のある家では米の粉団子で馬をつくり飾立てる風があつた。此の風は今より三十二、三年前までは未だ旺んに行はれ、町家でも「モツタヤサン」(金持の事)と目さる家は大抵競ふて立派な団子馬をつくり呉服店なども店頭目抜の場所に是を飾立て馬の手綱はお手の物も縮緬をつかひなどして質素な当時の見物人を驚かせ、夜分は又是を見物せむとする大人子供で市中はゾワゾワ賑ふたものである。

公衆に見せて自慢する此の団子馬は却々素人細工で手際よく出来るものでないから、いづれも其筋のくらくらとに拵らへて貰ふたもので、普通の民家では斯様に大袈裟の事はせず、家族思ひ思ひに小さき這子を作つて見たり或は天狗、お福、鯛、猿、柚、桃、烏賊、茄子胡瓜等を作つて見たり、其内極く器用の者が下図の如く桐の木でつくらの馬形の台木にしんこ細工同様団子を旨く練りつけて馬をつくつたもので此の桐の台木は当時見世屋に売てもゐたし毎年の用に大抵の家では保存してゐたものである。

そして翌日は是等の団子細工を碎いて醤油で「つけ焼」にして喰ふたものであるが、之を喰ふときは昔から灸治やいとをすへるといふ慣習があつた。尤も此の灸も蠻風じやとて後には次第に行はれなくなつたが、それでも尚ほ當時は猪駒喰ひたし灸は嫌だとして喰ひ逃げやらかす喜劇もあつて家中はキヤキヤ笑ひ賑ふたものである。西讃府誌にも「猪駒 八月朔日、此日田實トテ男子ノアル家ニハ米ノ粉ノ団子ニテ馬ヲ作りテ飾ル、是ヲ猪駒ト云、子生レテ初テナルハ初馬トテ親キ人ナド

ヲ招き宴ナドヲ設ケテ祝フモアリ云々」とあるから猪駒は此の地方にも存した事がわかるが高松では最早いつ言ふとなく廃たれて今頃の子供は「しし駒」と言つてもなんの事やら知らないのである。(中略)尚ほ、猪駒の「しし」は猪でない石である、昔は団子の事を「いし」又は「いしし」と呼んだから、此しし駒も、いし駒即ち団子の駒と云ふ意味であつたを後に猪駒となり、獅子を添ゆる如うになつたものじやとの説もある<sup>10)</sup>。

宮武が述べるシシコマの「シシ」は団子であるという説は、なるほどと思わせるところもあるが、この点は方言研究の成果を合わせながら、再検討する必要がある。

この他に、高松のシシコマについて、高度経済成長後に書かれたものを二例あげておく。『四国新聞』の昭和49年9月17日に「豊作を祝いダンゴ馬 八朔節供」と題してあらかわ日日呂史氏が次のような随筆を寄せている。

高松では八朔節供を獅子駒といっている。やはりダンゴを作っていたが、形は小さく、西讃の馬が前足を大きく上げているのに、こちらは後足をはねた形で、派手なタスキなどもつけていない。面白いことに、高松では飢饉で米の値段が上がるたびに藩から儉約令が出され、獅子駒も制限されて小さい形になったという。一方、丸亀藩内などでは、儉約令が守られずに黙認されたので、大形で華やかなものが残ったという。ダンゴ馬もお国ぶりで大きくなったり小さくなったりしたわけである。

昭和53年に刊行された荒川とみ三の『高松今昔記』には、次のようにある。

この日の数日前になると、どの町のもち屋も、正月前のように忙しくなる。だんご馬の注文が殺到するからである。一升馬から一斗馬、デカイのになると一俵馬まであらわれる。米だんごでつくられる飾り馬であるが、西讃地方がとくに盛んで、高松ではさすがに一俵馬というようなものは見られず、せいぜい一升馬が一番大きいというていどである。

これは男児の出世を祈り祝って、嫁の里方(さとかた)から贈るのがならわしであって、だんご馬のほかには獅子頭(ししがしら)などもある。このだんごの馬と獅子頭は、もち屋が注文を受けるだけでなく、街頭の屋台店でもその場で注文どおりつくって即売していた。また、籠荷をかついで売りにくる行商人もあった。

「エエ…ししに駒ア…」

と、秋風立ちそめた町に流れる売り声は、いまでも耳に残っている。

普通の民家では、この日、だんごの粉をねり、ナスビや魚類のいろいろな型をつくり、こどもにもつくらせて喜ばせた。しろうとがつくれぬ主体の馬は、専門家のもち屋に注文したのである。

片原町の盛り場、古天神さんの向かい側に、三谷という幕やノボりに字を書く店があった。はっさく二、三日前から、だんご馬の予約注文を受けて、夜おそくまでつくっていたのを、近所のこどもたちは、あかずに見つめていた。三谷のオッサンが馬をつくるのではなく、瓦町からきた舞台の背景を描く職人がつくっていた。高松では二升馬が大きいほうであるが、この三谷でつくるだんご馬はこどもの目にも生きていたようであった。

あくる日の二日、だんごでつくった馬やその他の細工もちを、割って焼いて、つけやき(砂糖

としょうゆをつける)にして食べる。こどもはいやでも食べさせられる。食べたらヤイト(灸)をすえられる。病魔払いのまじないだそうである。「馬は欲しいし、ヤイトはこわい」ということわざである<sup>17)</sup>。

荒川の記述がいつの時代のことかはっきりしないが、この記述を信ずるならば、新聞記事に表記されていた「獅子」と「駒」の団子細工は、獅子頭と団子馬であったことになる。こうしたものが、街頭で実演販売されたり、普通の民家では子どもたちが茄子や魚を団子で作っていたりすることや、翌日は子どもにヤイトをすえることは、西讃地方と変わらない。

最後に、高松には郷土玩具に「八朔馬」があったことに触れておく。高松市南鍛冶屋町には、嫁入り人形製作で高名な職人・梶川政吉がおり、後継者の竹次郎は、父の死後、東瓦町の首ふり虎製作で知られた人形師・沢井増徳に師事した後、郷土玩具職人となった。この竹次郎が昭和11年頃、商品説明を兼ねて発行した刷り物「高松郷土玩具の由来」(『ふりつち』第93号 2002年 窪田紀子編 讃岐おもちゃの会)に、八朔馬の紹介として次の一文がある。

八朔馬(張子) 旧暦八月一日を八朔と称して、高松地方では、男の子供を祝福する日であります。此の日は獅子駒といつて、男子のある家では、勢のよい馬と獅子頭を団子細工で作つて飾る風俗が、今日もなほ行はれてゐます。団子細工とともに張子製の馬も飾つたものです。

同時期に白と黒社から発行された版画集『版芸術(四国郷土玩具集)』第43号(藤本東一良作、料治熊太編、1935年11月)には、この八朔馬が描かれている。高松では、団子馬が姿を消す一方で、昭和10年代には郷土玩具として張子の八朔馬が作られたのではなかろうか。

なお、『庵治村誌』(現在は高松市庵治町)には、旧暦の8月1日は獅子駒節句といて、田の実りを祝ったものだとある<sup>18)</sup>。

### Ⅲ 八朔と人形飾り

#### (1) 近世の文献にみる各地の八朔

前節では、西讃地方の八朔飾りは、もともとは小型の団子馬が、後には大掛かりになった可能性を述べた。本節では、西日本一帯の八朔飾りを見てゆきながら、西讃地方の八朔飾りを再検討したい。まずは、近世の八朔に関する文献を確認し、『西讃府志』などの内容と比較しておく。

八朔を記す文献には、『公事根源』や『年中重宝記』をはじめ、八朔の贈答習俗の由来に言及するものが多い。たとえば『守貞謾稿』もこうした文献と同様の記述がある。

八朔(『正応二年記』これを載す。頼む人に物を贈ること三十年ばかり。しかれば建長中を始めとするか)古は米を折敷・土器等に盛りて音信に贈る。一条実経公の記に(文永中なり)七、



『版芸術』第43号 白と黒社

八年以来流布と云へり（建長中に中る）。実は、その起原分明ならず。所詮、田の実と云ひて、米穀成就を祝ふ事ありて後、頼（たのむ、たのみ）の縁語によりて、各互相頼む人に物を贈り、今世は、式正の日となるのみ。

『世事談』に曰く、後深草院建長の頃よりこの事あり。初めは田の見とて、米を折しき・かはらけなどへ入れて、人の許へ遣はしける。『羅山文集』に云ふ、昔この儀なし。四百年來、特に佳節となる、云々。また鴨長明『四季物語』に云ふ、朔日の旦は、たのむの御祝とて、昔はさしてものしたまはざりしを、小松帝の唯人にてましませしころ奉り初めて、御代につかせたまひても、昭宣公長く物せさせ奉れしなり、云々。ある人曰く、この『四季物語』と云ふ書は、疑はしくは偽書ならん。筆力も劣り、事実も慥かならぬ事多しとなり、云々。

中原『康富記』文安五年八月一日云々、八朔の礼の事、何頃よりこれある事やの由尋ね申し候処、後鳥羽院末つ方より出来か。但し慥かなる所を見得ず。所詮、先代より沙汰始まるか。鎌倉より事起るの由。注付、云々。また今日、尾花粥のこと、その由来何事や。自然見及ぶかの由、これを問はしめ給ふ。いまだ見及ばず、いまだ子細を知らず候由返答す、云々<sup>19)</sup>。

このように、八朔の由来などについて、過去の文献を引用しながら概説を行い、いずれも確証はないと結んでいる。これらの文献の時代には八朔の意味や来歴が不明になっていたことを示している。

しかし、これらに対して、近世史料にも、地域実態を記述したものがいくつかある。

延宝5年（1676）頃の成立という黒川道祐の『日次紀事』には京都の八朔の項目で「公事」「人事」に次のような記述がある。

#### 公事

波伊々々 儲君在東宮時 今日以波伊々々一雙被献 尊父君。其式以白紙造小偶人一雙。伸双脚相對坐。長式寸許。其一頂著紅錦。其一頂著白錦。以表有髮。而以髮捻作小輪。使小偶人一雙互牽之。或又以白紙造菊枝引之。是謂波伊波伊。按、小兒匍匐之義乎。是自城殿駒井氏家調進之。

人事 行器 京俗、今日家々乳母以行器一雙、贈其所保養之女兒。行器内盛生柿并藤花。藤花即ち白糸餅点赤小豆者也。此粉餅形以戻白糸。故称白糸。（中略）今日童兒戲以松笠造雉鳥、或以烏賊魚甲作鷺鷥。或以糸緊括金灯笼草実作瓢形、又以桃仁製松蟲。是等類自玩之、或互相贈。是謂頼合。今日民間互贈帶葉生姜為賀儀<sup>20)</sup>。

宮中では「波伊波伊」といわれる白紙で作った一雙の人形がに献上され、それぞれの人形の髪に赤と白の錦糸を付けて、それぞれを引き合つたとある。

民間では、女兒のある家々で、乳母が行器に生柿と藤の花を盛って贈ることが行われていたようである。この藤花とは、小豆をのせた白糸餅であるという。また、子どもたちは、松笠や烏賊や魚の甲羅を使って、雉や鷺、鷺といった鳥を作るなど、身近なところにあるものを使った玩具を贈りあっており、これを「頼合」と呼んでいたことが記されている。さらに、民間では生姜の葉を贈り合うことが行われていたようである。17世紀半ばの京都では、八朔は女兒の成長を祝い、子どもたちが自分で玩具を作って贈りあうという記述から、子どもが行事の主役であるという要素がうかがえ、また、生姜の葉を贈りあうことは、植物の呪術性を期待する心性がうかがえる。

『日次記事』からおおよそ100年後の宝暦2年（1751）頃の成立である『大日本地下年中行事 恵美須草』は、摂津国東生郡玉造庄森宮の神官・近藤龍翁による。ここには次のようにある。

八月朔日を八朔とて、当時専ら是を用て礼式を勤る事、公民ともに同じ。七月七日は五節句のうちなれども、是を用ず、唯八朔を用る時の風なり。これをたのもの節句といふて、専ら人のもとへ菓子など送る。人も又我がもとへ送る。小児は薏苡仁〔割注〕和名しゆすたまといふの木につばめとんぼうなどのかたちを紙にて作り枝に付て持遊ぶ事有しが、今は此事大方うしなひてやみぬ<sup>21)</sup>。

18世紀半ばの大坂では、五節供の一つである七夕には特に節の挨拶は行わず、八朔に菓子などを贈りあって挨拶に代えている。また、この時代にはほとんど見られなくなった風俗であるというが、子どもたちがシュズダマの枝に、紙で作った燕やトンボなどを下げて遊んだことが書かれている。このように、大坂では八朔には七夕に代わる行事が行われ、かつては子どもたちが、あたかも七夕の笹飾りのように、ジュズダマの枝に下げ飾りをして遊んでいたことが示されている。

ここまでの文献では、民間の八朔習俗は、下部の者が上部のものに贈答し、庇護してもらえるように「頼む」という意味は薄く、子どもたちの健やかな成長を「頼む」日であったように思われる。

こうした傾向は全国的なものであったのかどうかをその他の文献でも確認してみたい。貞享2年（1685）の「会津風俗帳」年中行事には、「朔日 八朔祭りとして朝小豆飯にて祝ひ、男女共にあそぶ<sup>22)</sup>」とあり、やはり子どもたちが遊ぶ日であった。

19世紀前半の「武蔵埼玉郡西袋村小沢氏年中行事」では「八朔 赤飯歟、あつきめし歟、寺・観音堂へ遣ス、分家よりも遣し不申、当家よりも遣し不申候<sup>23)</sup>」とあり、子どもが関わる記述は見られない。

寛政9年（1757）の「長崎歳時記」には、

八月朔日 八朔礼地役人おのおの金銀を包み、是を台にして奉行所にいたり節を拝し且冥加を謝す、よつて俗に冥加銀とも唱ふ、八朔銀といふは常に呼ぶ名なり、其分限に応じて差等しなわけあり、寺社はおのおの種々の紙等を台にして捧ぐ。但、此日古株町使役十五人其外散使表使筆者へも掛りの町々より八朔銀を相贈る<sup>24)</sup>

とあり、贈答が重要視されている。

文化年間の「諸国風俗問状」の回答で注目されるのは、まず「伊勢国白子領風俗問状答」である。

女子有家にて、夕顔にて馬を造り、緋縮緬様のさきでにて手綱をかけ、五色の七つ蒲団をしき、つゞら馬の如く仕立る也。馬士の人形の牽たる体を作り、扱親族懇意の家々に持歩行て見する也。但し、此風俗今はわずか二、三家にのみ残る<sup>25)</sup>。

現在では数軒の風俗であるが、女兒の家では夕顔で馬を作って、その馬には縮緬の手綱をかけ、馬の背には七枚の布団を重ね、「つゞら馬」のように仕立てたという。「つゞら馬」は『東海道中膝栗毛』などにも見えるが、つづらを背にして、その上に人を乗せたり、荷物を運んだりした馬のことである。「七つぶとん」という言い回しは、道中の宿場馬に乗るとき、七枚の乗掛けふとんを重ねて敷いて乗ることで、『浮世草子』や『好色一代男』などでは贅沢なことのたとえとして使われている。このように、伊勢国白子領では、八朔に女兒が贅沢な仕様に見立てた瓜の馬を拵え、これを持って親戚などを回るといふ。これが、裕福な家に輿入れする様子を再現したものならば、子どもが出世するように

との親の願いが込められたもの見ることもできよう。

続いて「備後国福山領風俗問状答」には、次のようにある。

女子産れ候家々へは、親類より田面の祝とて、粉餅にて人形を作り、赤昏を腰にまき、たのも人形と名つけ、酒肴を添送り申候。多くは作りて賣り候をもとめも仕候。或は此人形は天子をかたととり、新穀を見めくらせ給ふ御姿なりと申、後に浄き處へおさめ置き、急に熟出候時、これを水にひたし給候へは、早く治するなど、も申。凡女子ある家には、例年紙雛・田面人形を飾り、神酒・燈明・菓類を供へ祭り申候。鞆には、男子ある家々、犬の大きさ程なる木馬をかさり、門へ出し、或は小兒をのせて引ありき候。団子にて作候も他処同様に候。又沿海の村に、男子ある家には、小なる舟を製し、飾りは紙にて仕候も御座候。此日、町村并に山南村繩引有之。長さ五六十間、太さ壹尺二三寸の繩をなひ、両方へ引き、引かち候方災なしと申候<sup>26)</sup>

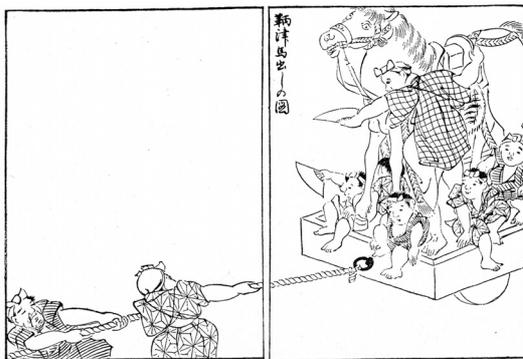
女兒の生まれた家では、赤い布を腰に巻いた粉餅でできた「たのも人形」を買い求めて用意するが、これは天子が新しい稲穂を見回る姿であるという。盆や八朔に牛馬を作り、これを神や精霊の乗物として供えることは一般的だが、乗物にのる天子の姿を作るという点は、注目される。この人形は保管して、子どもが熟を出した時に水にひたすと早く治るといふ呪具でもあると説明されているが、この点からたのも人形は人形としての役割が期待されている。田面人形は紙雛とともに飾るともあり、八朔にも上巳の節供のように雛人形を飾っていることがわかる。

一方で鞆の浦周辺では、男児のある家で犬ほどの大きさの木馬を飾り、外にこれを曳き出す時は、小さな子どもはこの馬の上に乗るといふ。挿絵には、馬の下に台座があり、ここに輪がついている。子どもたちはこの台座の上に乗っている。また、「団子にて作候も他処同様に候」とあり、団子で馬を作っていたことがうかがえる。伊勢国白子領に続き、ここでも八朔と馬が結びついていることは、西讃地方の馬節供となんらかの関係性があることをうかがわせる。

さらに福山領の海沿いの村では、男児のある家では小さな舟を作り、紙などで飾りを施すことが書かれている。

「備後国深津郡本庄村風俗問状答」にも福山領とほぼ同様の「田面人形」に関する記述がある。

田面人形と申て、米粉にて人形を拵へ、赤紙にて少しつゝ腰を巻き、市店にて相求め、子共等立祭り申候。尤古実<sup>27)</sup>は禁裏田面の穂を御上覽被遊候御姿と申、至て大切成御像共、下方にては夫も知らぬ者多く、只の人形思ひ翫し申候。有心得の者は行合と申て、俄に頓病やみ申に田面人形の大切に仕置、其時茶碗に水を入、陰（影）を移し飲めは忽治し申と云人御座候。左すれは禁帝の



「備後国福山領風俗問状答」

御姿に疑ふ所もなき事にて御座候<sup>27)</sup>。

さらに、「備後国沼隈郡浦崎村風俗問状答」には「男の子には小さき船を拵、館等の飾は白紙にて仕候。女の子にはだんごにて、人形様の手遊びを贈り申候<sup>28)</sup>」とある。

これ以外の地域では、贈答をしたり、新穀で餅を搗いたりという記述であるが、伊勢国と備後国では、いずれも八朔は子どもの成長を祈る節供のようにとらえ

られており、これは先の『日次記事』の記述と同じ要素がある。つまり、文献の時代は違うが、京都から備後国にかけての地域では、八朔は子どもの節供ということができ、そこでは瓜や団子で人形が作られたり、馬や船が作られたりしたという特徴がある。

「諸国風俗問状答」に回答のあった地域で、この他にも文献をあげておくと、伊勢桑名の八朔に関する記述が、文化11年（1815）の『骨董集』にある。

今伊勢桑名わたりの俗に、女童のこぼに、八月朔日を、姫瓜の節供となへ、ひめ瓜に顔を書き、べに、おしろいを、いろどりて頭とし、つけ木、又竹の筒などを身とし、紙、又絹などの衣服をきせて、ひいな人形につくり、棚にすゑ、酒、赤飯などをそなへてまつる。又、九月九日を、かづら子の節供となへ、ひいな草つみて、ちひさく男女の頭をつくり、これも棚にすゑ、おなじごとく物そなへてまつるとぞ。前にもいへるごとく、瓜に顔かく事は、清少納言の草紙に見え、ひいな草つむ事は、源三位頼政卿の父、源仲正が歌によめれば、いといとふるき事なり。按（おもふ）に、これらはいにしへ質朴なりし世に、天児、母子などの略儀とし、贖物のこゝろばへにてまつれる、古俗のなごりなるべし。〔割註〕これらをこそひいなまつりともいふべけれ。今の上巳のひいなのは、かへすがえすもいにしへに似ず<sup>29)</sup>。

19世紀初めの伊勢桑名付近では、八朔を「姫瓜の節供」と呼び、瓜を顔に、木や竹を胴体にして紙や絹などの着物を着せて雛人形を作り、これを棚に置き酒や赤飯を供えて祝う習俗があることを伝えている。「伊勢国白子領風俗問状答」でも瓜を馬に見立てて人形を作っているが、伊勢周辺では、瓜が収穫される時期にあたる八朔が「瓜節供」としてとらえられていたことを示している

備後国については、文政2年（1819）の「竹原志料」、文政5年（1822）の「知新集」、文政8年（1825）の「芸藩通志」などに八朔の記述がある。

#### 「竹原志料」

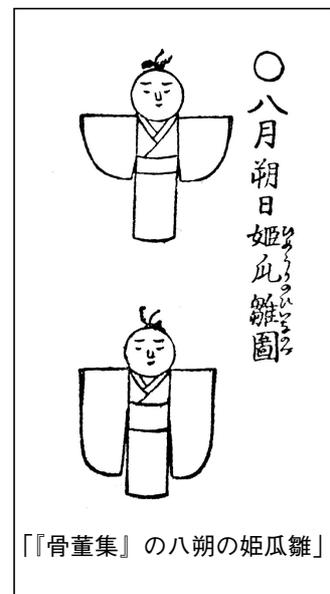
八月朔日は田実節句とて、藁ニテ作りたる馬を台ニのせ、小さき船様を造下ニ車を附ケ小児玩ニ曳あるき申候。有女子家ニは、小き屋台を造人形、或は花鳥の造り物を飾り、曳歩行申候<sup>30)</sup>。

#### 「知新集」

八朔、女子をもつ家たのもを飾るといひて、竹に紙をはり家の形をつくり、又紙をいろとりて男女の人形をとゝのへ、おほくハ芝居者の姿に似せ、其前へ稲の初穂木の実などをそなへて祭る、昔々ハたゝ団子もて人形をつくり、板のうへなどへならへて祭れるのミなりしを、ちかき頃より上件の如くなれり、いつれにまれ後の雛の転りたるならんか<sup>31)</sup>

#### 「芸藩通志」

村落、穀神を祭り粉団をつくりて田の実なりを賀す、女兒、米粉を以人形を作り、府市には彩紙をもて、人勝を作る、賀茂郡竹原数村、男児、新藁を束て馬を作り、芻人（勝殿）を乗せ、女兒は、家の形を作り、人勝を入れてこれを弄ぶ、尾道町、童子、小船を装ひ、産土神祠（ひき）に挽ゆく、田実船（たのみふね）と呼ぶ<sup>32)</sup>



『骨董集』の八朔の姫瓜雛

これらの内容は、「備後国福山領風俗問状答」をはじめとする備後国の報告にみられた内容と類似している。ここで指摘しておきたいのは、八朔の飾りには、男児と女児とで異なる飾りが用意されていたことである。女児には「後の雛」の言葉が文献にあるように、紙や団子で作った人形が雛人形のようにして与えられ、男児には馬や船などを形作った人形が与えられている。西讃地方にも、かつては男児にも女児にもこうした人形が与えられたが、男児のための団子馬が重視されて現在に至った可能性がある。現在では、女児が雛人形を飾る習俗は、仁尾町にしか見られない。現地では、藩主が3月3日に自害したことを悼み、雛節供を八朔に行うようになったと伝承でされているが、一方では、八朔の雛人形が、京都や伊勢、備後で見られた人形飾りの後の姿だといえるのではなかろうか。

## (2) 西日本の八朔と人形飾り

前項では、近世文献から各地の八朔の様子を見て、女児と男児にそれぞれ紙や団子で作った人形が与えられたことを述べたが、瀬戸内海沿岸地域から福岡県辺りにかけては、八朔に人形を作り、子どもの成長を祈願する民俗が広範囲に見られる。

香川県に隣接する愛媛県の八朔については、黒河健一の『伊予子ども歳時記』に詳しい<sup>39)</sup>。八朔にはたのもさんをまつる風習が県下各地にあった。松山・道後では「たのもさん、たのもさん」といって大人が売りに来たという。たのもさんは紙人形で、青や紫の紙で着物を作り、顔はトーキビのカラーであった。伊予郡松前町でも青カヤをしんにしてタンザク紙を重ねて裁ち、あわせの着物を着せて床に祭る。これをたのも様といって家族の数ほど作り、板の上に立ててお供えをする。そして夕方には皆のヤクを負って川へ流されるという。東予と中予では米粉で人形を作った。東中予でも農家では必ず自宅で作ったが、桜井町では農家以外の家には売りに来た。今治の市街地は日ごろ下肥をもらっているお百姓さんがたのもさんを作って年々贈ったという。

周桑郡地方では、八朔の前の晩、宵節供に家族全員で田面人形を作った。その家の子どもの数だけお膳やお盆を出す。それぞれの膳や盆の回りに「摘まみたのもさん」を作って置く。「摘まみたのもさん」は踊り子で、膳なら四隅、盆なら所々に少し背が高くて頭にちょっと帽子を載せたものを置く。これは音頭取りだという。文政6年(1823)頃の『今治夜話』にもすでにこうした人形の図が描かれている<sup>34)</sup>。この他、子どもたちは思い思いのものを作った。必ず作るようになっていたものもあって、鶴と亀、犬・兎・鶏・猿・豚・大根・人参・南瓜・西瓜・松茸などの家畜や野菜、鯛や金魚、ひょうたんやきんちゃく、そして馬と牛である。殊に牛は難しく、上手に作った人は見たことがなかったという。それから人物や金太郎・牛若丸・浦島太郎・三番叟などだが、これが作れる家は村でも二、三軒だった。子どもたちは村中のたのもさんを見て歩いたといい、学校でも大正や昭和初期には粘土細工の「田面人形展覧会」が開かれたという。周桑郡の山間地方では、踊り子のたのもさんを幼児の背中に結びつけて悪病除けに使い、戸口の上敷居に吊しておいて、悪病が流行した時にこれを食べる風習があった。そして、山間部も平野部も2日にはたのもさんを焼いて食べるかわりにヤイトをすえられたという。

香川県と瀬戸内海を挟んで対峙する岡山県では、真庭郡落合町栗原で、八朔に、たんぼの一角で、成熟前の稲をはえたままで十字に組みあわせて馬の形にして豊作を予祝したという。

岡山県では、「シシコマ」と呼ばれる団子の人形も存在する。岡山市旭東や原尾島付近では、「仏の馬やドウドウや」と呼びながらシシコマ売りが回ってきたという。これは米の粉で馬の形をして赤・青・黄などの色をつけた団子で、それを矩形の浅いかごに杉の葉を敷いた上にのせて売りにきた。

岡山市の小串や阿津地方では、女の子が生まれて初めての八朔に「シシコマ」をしたという。八朔の前日に、近所から娘や若い嫁が4、5人も朝から手伝いにきて、米と餅米の粉を湯で練って固めて蒸し、それを臼でついて果物や牛・馬・犬・鯛・伊勢えびなどの形を、鶏卵大に形づくった。これらの細工のこともシシコマといった。最後にウスネブリといてといて背の低い島田まげの人形娘二人をつくった。これらに金・銀・赤・青・黄・緑など十数種の色粉で彩色、髪油で表面に光沢をつける。出来上がったものは、杉や檜の葉、経木の上にのせて玄關に並べておく。すると翌日の八朔の朝、「シシコマをつかあせえ」といって近所ばかりでなくて隣村かちも大人も子供ももらいにくる。来る人すべてに一つずつ与えるから、たちまち無くなってしまう。もらった人たちは糸に通してもち帰り、床に飾って納米開きをし、やがて捨てる。シシコマを多くの人がもらいにきてくれると、その家の女の子にいい縁談があると考えられていた。シシコマは食べられないし、米を5升以上も用い、色粉などにも金をかけ、不経済なので、行われなくなり、今はまったく見られない。牛窓町では、いまもシシコマをしているという<sup>35)</sup>。

岡山のシシコマは、「仏の馬」と呼ばれ、盆の馬と同一視されているところは気になるところである。また、この馬は男児のためではなく、女兒のために作られているもので、もらいにきた数ほどの縁談があるというのは管見の中ではここだけである。

広島県では、「備後国福山領風俗問状答」に「鞆には、男子ある家々、犬の大きさ程なる木馬をかさり、門へ出し、或は小兒をのせて引ありき候」とあったが、鞆の浦では現在でも「八朔の馬出し」としてこれを行っている。もっともこれは、昭和のはじめには姿を消したが、住民の手で平成14年(2002)に復活したものである。八朔の早朝、沼名前神社には馬の台に乗った大小の馬が揃う。4台は江戸から明治期の馬で、他は住民手作りの馬である。総勢10数台が町内を練り歩き、大きな台車には子どもたちが何人も乗り、小さく軽い馬は子どもたちが曳き回す。かつては鞆の浦は潮待ちの港町で、大きな商いをする家が多くあった。練り歩く途中で、歴史的な建物を残す商家でかつての馬出しが再現される。幔幕を張った商家の大戸が上がると、子どもを乗せた馬の台が引っ張り出され、江戸時代の白馬が姿を見せる。ゴール地点では、冬瓜の煮あい(煮物)・冬瓜なますなど、祭りの料理がふるまわれる<sup>36)</sup>。

「備後国福山領風俗問状答」では「沿海の村に、男子ある家には、小なる舟を製し、飾りは紙にて仕候も御座候」とあり、「芸藩通志」には「尾道町、童子、小船を装ひ、産土神祠に挽ゆく、田実船と呼ぶ」とある。

これに関しては、尾道市梶山田では、タノモ(タノミ)ゼックとか馬の節供とよばれており、尾道市では、農家が豊作を祈り、北前船を模したタノモブネ(田面船)をひいて氏神に参った。また初の男児が生まれると、お祝いに贈られたという。厳島では、家ごとに30桝から1びんくらいの小船をつくり、紙の帆をたて、家族と同数のしんこ細工の人形をのせ、果物・野菜・ろうそくをのせた状態で家へ飾っておき、八朔の夜、潮の上がったときに、神社の境内から海へ流した。対岸大野の農家では、

これを拾い上げ、持ち帰って田の畦に埋めると豊作になるといわれていた<sup>37)</sup>。

戦前の記録では、有坂与太郎は『郷土玩具展望』に「八朔の田面船」として次のように書いている。

尾道市一帯 例年旧八月朔日に、八朔、田ノ実の節句を行ふ。常日、尾道市内の家毎に「田面様」を奉祀し、田面船としんこ細工の馬、又は人形を飾り、祭果て、後、これらの人形を田面船に載せ、海或は川へ流す慣例あり。立穀豊穰の所願とす。田面船は尾道港に出入する千石船を模作したるものにて、素材は生産者の本業柄杓の切り屑を用ふ。檣を立て屋形を配し、四輪を装置せる船、雅氣抜群の成果あり<sup>38)</sup>。

尾道では、北前船を模したという田面船とともに団子の馬や人形を作り、これらを持参して氏神に参る。祭りの後にはこの船に人形などを乗せて海に流したという。これは海辺の町というよりも農家を中心に行われているようで、豊作が祈願されているという。ここには、今まで見てきた八朔飾りのさまざまな要素が見られる。人形は家族の分だけ作られ、厄払いを意味するように船に乗せて海に流される。「備後国福山領風俗問状答」では女児の人形が熱病の時に人形の役目をして<sup>ひとがた</sup>いたが、八朔の人形はこうした人形としての役割を担っていたと考えられよう。また尾道市梶山田では「馬の節供」と呼ばれているが、『郷土玩具展望』にあるように、田面船にはしんこ細工の馬を乗せて流している。「備後国福山領風俗問状答」では、「たのも人形」は天子が新しい稲穂を見回る姿だと書かれていたが、そうであるなら、団子の人形は豊作を約束する神的なもので、愛媛県で豊作を祈願される「タノモサン」と呼ばれる団子の人形の基層には、これと同様の心性があったのではなかろうか。そして、福山の馬出しや西讃地方の団子馬と共通する「馬」は、豊作を庶民に「頼まれ」る神の乗物としてとらえることが可能であり、もともとは馬に乗っていた神が、千石船の導入とともに船に乗せられ、さらに大きな豊かさをもたらすように意識されたとも考えられる。

山口県柳井市では、3月には雛遊びをせず八朔に雛遊を行っていたというが、現在では行われていない。行われなくなった背景として、八朔は旧暦の使われていた頃には重要な日であったが、新暦になると8月1日は真夏であり、9月1日は二百十日として記憶されるようになったためであるという。こうした結果なのか、美弥郡秋芳町嘉万の上市部落では、家ごとに風の神になぞらえた人形や飾り物を作り軒に飾っておくという習俗がある<sup>39)</sup>。神の姿を人形になぞらえることは、こうした事例にも見られる。

さらに九州で、八朔の習俗に人形がかかわるものを見てゆきたい。

福岡県遠賀郡芦屋町では、初の8月1日を祝った。男は藁馬、女はダゴビナ（団子雛）などを檀に飾る。福岡市および周辺では、笹竹に親戚や近所からもらった面や弓矢や短冊などを賑々しく飾ってザシキに立てる。返礼として、福助の絵入り団扇に世帯道具を見立てて配った。ただ現在ではこの民俗はほとんど消滅したようである。糸島郡前原町井原では、旧8月1日（新9月1日）男の子の生まれた家では、青竹の枝に弓矢・お面・おもちゃなどをつるし、タンザクノトリと称して、神社の境内や自宅の庭などに子どもたちを集めて、速いもの勝ちに奪い合いをさせる。このような習俗は大正時代まで県下一円にあった。返礼の品には、シマイオケ（仕舞桶）とか金たらいとかやかんなど日用の什器類が用いられた<sup>40)</sup>。

芦屋町の八朔で、男児、女児それぞれに、藁馬の人形や団子雛が作られるという習俗は消えかかってきたが、町の人々の力で復興された。藁馬は、壇飾りの一番上に大きな大将馬を置き、子どもの名前を入れる。他の馬には紙で作った人形と戦国武将の名前を書いた旗をのせる。紙の人形や馬というこれまで見てきたモチーフは、福岡に来て、戦国武将と結びつく。西讃地方では、八朔飾りに神功皇后がつきもので、張子の虎もまたつきものである。こうしたモチーフはいずれも朝鮮征伐と関わりがある。瀬戸内海から北九州にかけては朝鮮征伐のルートでもあり、こうした道筋が、豊作祈願の団子の人形に男児の出世を祈願する意味を込めた武者人形や鎧兜が加わってゆく道筋になるのかもしれない。このことは、今後、神功皇后の伝承などとともに検討しなければならないことである。なお、芦屋町の70代から80代の人、八朔に馬を板に貼り付けて曳いて回ったといい、芦屋歴史民俗資料館には鞆の浦で見られた「八朔の馬出し」の馬に良く似た木馬が展示されていた。

北九州では、八朔に七夕飾りにも似たタンザクカザリをすることも特徴としてあげられるが、これについて、斎藤良輔の『郷土玩具辞典』には次のようである。

男児出生の家に笹に吊した薄板製の吊し物を贈る風習が古くからあり、昭和9年(1934)刊の玩具画集『おもちゃ画譜7集(川崎巨泉)』には、「八朔吊しものには、宝船、雀、提灯、熨斗、槌、お面、短冊、弓矢、半面、団扇、役者絵其他を賑はしく下げて室内又は屋外へ飾る。翌日には袴姿の子供の絵のお札紙を添へて一枚づゝ折つて知人へ配ると云ふ、ヘギ製の色々のものには赤緑など刷毛書きの彩りがあつて頗る風雅なものである。香魚はヘギを切抜き背を緑に目口は紅、藁に編み出す<sup>41)</sup>。

熊本では、旧暦8月1日の日にハナウマ(花馬)をつくる。ハナウマは茄子を胴体にした馬のことで、竹を4本刺して足にし、尾とタテガミはとうきびの毛をつけ、タテガミにはオシロイバナの花を刺したものである。これを七夕竹にのせ、川や海に流す風習があり、ハナウマは、この日、苗代以来、田の中におられた田の神が乗って帰られるといわれている<sup>42)</sup>。このハナウマは、田の神の乗り物であるとされるが、盆の精霊を載せる茄子の牛馬と良く似ており、これをのせて流すのは七夕竹である。

鹿児島では、国分市阿多石では、精霊があの世界に帰りつく日であるといつて、米の飯を食べた。また出水郡野田村熊陣では、八朔だんごをつくる。甕島ではボタタキセツといい、山のふもとの良い水の出るあたりにかまどをつくり、女の子が数人集まって土鍋で飯を炊き、ズシ(雑炊)をつくったり、ぼた餅をつくったりして料理の腕を競う<sup>43)</sup>。

## おわりに

本稿では、香川県西讃地方で行われている八朔の団子馬の製作や習俗について、その実態を現地調査に基づいて記した。

八朔の団子馬に関しては、従来西讃地方に顕著な習俗であるといわれてきたが、今回の調査によって明治期の新聞記事などからは、「獅子駒」などの名称で東讃地方でも盛んに行われていたことが明らかになった。

また、団子馬は時代とともに大型化し、これを飾る場所には松や竹で景色が作られるなど大がかり

なものとなった。特に廻船業を営む商家や旅館などではその傾向が著しかったようだが、それは、家の豊かさを家の外に示そうとした結果であったように思われる。

一方農村では、大型の団子馬製作を得意とする者が現れたり、農家は副業に小型の団子馬を作って売ったりする者も現れた。こうした西讃地方各地の団子馬作り名人の存在によって、団子馬の習俗が現在まで継承されてきたといえよう。新暦で行われる年中行事が多い中で、団子馬は旧暦の八朔に行われ続けてきたことも、農村の担い手たちの存在があったからではなからうか。各地の名人の多くが故人となった現在は、この技術を受け継いだ菓子職人の手によって、伝承の糸はつながっている。

本稿では、団子馬を含めた八朔の馬や人形などについて検討するため、京阪地方から瀬戸内沿岸地方、そして九州地方にかけて、近世資料と近年の伝承を用いてその広がりを確認した。その結果、こうした地域の八朔には、団子で作られる馬や人形が数多く見られ、それらは男児と女児では作られるものが異なる傾向があることがわかった。早期の八朔の人形には、子どもの災厄を流す人形ひとがたのような役割を期待されていたようである。西讃地方の団子馬の源流にもこうしたものがあつたかもしれないが、ある時期に男児の誕生祝いが強く希求されることによって形成された可能性もある。

藁や団子による作り物の馬は、七夕や盆だけではなく八朔にもある。この習俗は、日本の年中行事の構成にかかわる重大な問題の存在することもうかがえた<sup>49</sup>。このほか八朔の団子馬製作やその習俗について、本文中に具体的に記した諸課題が得られたことも幸いであった。

本調査にあたり、香川県丸亀市立資料館の吉久由紀子氏、丸亀市観光協会の田川建三氏、広島県福山市鞆の浦歴史民俗資料館の園田裕氏、福岡県遠賀郡芦屋町芦屋歴史民俗資料館の山田克樹氏をはじめ、それぞれの地域の方々からさまざまな教示や協力を得た。また、株式会社吉徳の林直輝氏には文献について示唆をいただいた。末筆ながら深甚な謝意を表しておきたい。

#### 《注》

- 1) 和歌森太郎 「八朔考」(『和歌森太郎著作集』第9巻 1981年 弘文堂)
- 2) 五来重 「宗教歳時記」(『五来重著作集』第8巻 2009年 法蔵館 166-167頁)
- 3) 二木謙一 『中世武家儀礼の研究』吉川弘文館 1985年 126-129頁
- 4) 山田邦明 「鎌倉府の八朔」(『日本歴史』2000年11月 日本歴史学会編 吉川弘文館 40-46頁)
- 5) 本郷恵子 「八朔の経済効果」(前掲注(4) 32-37頁)
- 6) 伊藤信吉 「八朔における贈答関係の一考察」(『皇學館史學』第18号 2003年3月 皇學館大學史學會編・刊 33-49頁)
- 7) 『柏崎日記』(『日本庶民生活史料集成』第15巻 1971年 三一書房 673頁)
- 8) 四国民俗学会編・刊 『四国民俗』第39号 2006年12月
- 9) 「讃岐藤村家年中行事録」(『日本庶民生活史料集成』第23巻 1981年 三一書房 435頁)
- 10) 秋山照子 「『阿比野家祭式 全』にみる行事と食」(香川県立文書館編・刊 『香川県立文書館紀要』第7号 2003年3月 34頁)
- 11) 『西讃府志』 京極家編 1929年 藤田書店 73頁
- 12) 『多度津町史』 香川県仲多度郡編・刊 1918年 1147-1148頁

- 13) 『郷土の文化』 郷土文化大学編 1978年 観音寺中央公民館刊 42頁
- 14) 前掲註(13) 42-43頁
- 15) 小川直之 「明治改暦と年中行事－太陽暦受容の諸相－」(『近代庶民生活の展開 くにの政策と民俗』 1998年 三一書房 30頁)
- 16) 宮武省三 『讃州高松叢誌』 1925年 80～83頁
- 17) 荒川とみ三 『高松今昔記』 1978年 歴史図書社 139-140頁
- 18) 『庵治村誌』 庵治村誌編集委員会編 1971年 木田郡庵治町刊
- 19) 『守貞謾稿』第4巻 2008年 岩波書店 249-250頁
- 20) 『日次記事』(前掲註(9) 87頁)
- 21) 『大日本地下年中行事 恵美須草』(前掲註(9) 238頁)
- 22) 「会津風俗帳」年中行事 (前掲註(9) 343頁)
- 23) 「武蔵埼玉郡西袋村小沢氏年中行事」(前掲註(9) 347頁)
- 24) 「長崎歳時記」(前掲註(7) 786-787頁)
- 25) 「伊勢国白子領風俗問状答」(『日本庶民生活史料集成』第9巻 1969年 三一書房 624頁)
- 26) 「備後国福山領風俗問状答」(前掲註(26) 701-703頁)
- 27) 「備後国深津郡本庄村風俗問状答」(前掲註(26) 736頁)
- 28) 「備後国沼隈郡浦崎村風俗問状答」(前掲註(26) 765頁)
- 29) 『骨董集』(日本随筆大成編集部編『日本随筆大成第1期』第15巻 1976年 吉川弘文館 551頁)
- 30) 「竹原志料」(『日本庶民生活史料集成』第22巻 1979年 三一書房 756頁)
- 31) 「知新集」(前掲註(9) 550頁)
- 32) 「芸藩通志」(前掲註(9) 542頁)
- 33) 黒河健一 『伊予子ども歳時記』(日本民俗文化資料集成 第24巻 1996年 三一書房 428-431)
- 34) 大本敬久 「八朔の歴史と民俗」(前掲註(8) 22頁)
- 35) 土井卓治・佐藤米司 『日本の民俗 岡山』 1972年 第一法規 233-234頁  
岡山県史編纂委員会編 『岡山県史』第16巻民俗Ⅱ 1983年 岡山県刊 206-209頁
- 36) 福山市鞆の浦歴史民俗資料館友の会編 『鞆の浦の自然と歴史』 2008年 福山市鞆の浦歴史民俗資料館活動推進協議会刊 55頁
- 37) 藤井昭 『日本の民俗 広島』 1973年 第一法規 223-224頁
- 38) 有坂与太郎 『郷土玩具展望』上巻 1940年 山雅房 213-214頁
- 39) 宮本常一・財前司一 『日本の民俗 山口』 1974年 第一法規 224頁
- 40) 筑紫豊 『日本の民俗 福岡』 1974年 第一法規193-194、233頁
- 41) 斎藤良輔 『郷土玩具辞典』 1971年 東京堂出版 278-279頁
- 42) 牛島盛光 『日本の民俗 熊本』 1973年 第一法規 263頁
- 43) 村田熙 『日本の民俗 鹿児島』 1975年 第一法規 247頁
- 44) 小島櫻禮は「盆の馬と八朔の馬と」(『民俗』第194・195号 相模民俗学会 2006年2月 21～23頁)で、

『日本民俗地図』でも、東北地方の盆の馬は、麦わらや真菰などをつくった七夕馬の系統で、関東地方から中部地方へかけての胡瓜や茄子の馬牛とみごとに住み分けており、分布からも茄子の馬の類が七夕馬に相当することは明らかである。西日本に顕著な八朔に馬の形のもの飾る風習もまた、分布からみて、七夕馬につながる行事である。それが熊本市西部では、七夕の竹と八朔馬とがみごとに一続きになっていた。

と述べている。小島の指摘が妥当であれば、岡山の「仏の馬」や福岡の竹飾りも七夕から盆、そして八朔が一続きであることになる。さらに小島は、八朔馬が『日本書紀』天武五年（六七六）にいう八月の大祓えの祓えつものの馬にさかのぼることは疑いがなく、盆行事は秋分を指標にした六月から八月にかけての祓えの行事を母体に成立したものであるとの仮説を提示している。

## [Summary]

The Horse Festival of *Hassaku*:  
With Focus on *Dango-uma* Made in Western Kagawa Prefecture

HATTORI Hiromi

*Hassaku*, or August 1 on the lunar calendar, has long been recognized as the day when ears of rice appear. On the day, farming communities have traditionally organized various ceremonies, praying for abundant crop and holding preliminary celebrations of good harvest. For example, people reap their first ears of rice and dedicate them to god; the head of a farming family conducts “*tahome*,” in which he walks around his rice fields, praying to the god of rice-fields for good harvest; and people pray so as to drive away harmful insects (*mushi-okuri*).

Meanwhile, *hassaku* has been considered as the day that marks the transition from summer to autumn, the day when people begin to work at night, the day when servants end their terms of service, and also the day that marks the end of the series of *Bon* events.

With such functions aside, *hassaku* is a special day of “*tanomi*” (reliance), when people give presents to others as a token of special thanks for their daily support and patronage. In older days, the custom of present-giving was observed particularly well among the warrior class. The Muromachi shogunate, for example, established posts called *hassaku bugyo* or *otanomi bugyo*. In the Edo period, *hassaku* was valued as an official memorial day when feudal lords visited the Edo castle, clad in the formal attire of white *kimono* and long *hakama*. At the Imperial Palace, on the other hand, a ceremony was held to show horses, presented by the shogunate, to the emperor.

While *hassaku* serves as a day for such a variety of events, people in some areas celebrate *hassaku* as something equivalent to the Girls’ Festival (March 3) or the Boys’ Festival (May 5). In Seisan area, or western Kaga prefecture, people hold *umasekku* (seasonal festival of horses) on *hassaku* to celebrate the birth and growth of boys.

The term *umasekku* derives from the tradition in which *dango-uma*, a toy horse made by pressing dumpling dough of rice flour onto a horse-shaped armature, is displayed along with warrior dolls in an alcove in the living room or at the entrance of a house. Although many households made their own *dango-uma* in earlier days, that tradition has barely survived by the hands of confectioners today.

The current paper reports methods of making *dango-uma* and the present situation surrounding its practitioners, based on research conducted in places including Marugame and Kotohira-cho, Nakatado-gun. The paper also surveys ornaments made and used in and around the area.

西讃地方の団子馬製作－香川県丸亀市－

① やまわき菓子舗 山崎智氏・政子氏



山脇智氏・政子氏



かつて店舗のあった場所には団子馬の土台になる馬台が置かれている。



団子馬に使われるガラスの目・口金



シュロのタテガミと尻尾



団子馬製作に用いられる道具。山脇氏の手作りである。

② 御菓子処乃だや 野田正教氏・正氏



正教氏は主に団子（生地）作りを担当する。



体力の必要な団子馬作りは正氏を中心である。



団子馬の彩色や飾り付けは野田家の女性が行う。



団子馬とともに納める鯛。



鯛の彩色はスプレーで食紅を吹きつける。



手前は古い団子馬の台。時代とともに馬の立ち上がりに角度がついている。



出来上がった馬は注文した人が取りにくるのを待つ。

③ 丸亀駅前実演展示 岡雅久氏



駅の構内に作られた団子馬の作業台



団子の練り込みに力を込める岡氏



駅の構内に展示された団子馬



団子馬の目には血走った様子が表現されている。

西讃地方の団子馬製作－香川県仲多度郡琴平町－



花岡家の納戸の2階にはたくさんの馬台がある。



米の粉を捏ねて丸め、茹でるまでは十四子氏が担当する。



茹で上がった団子はすぐに石臼に入れる。



団子を搗く満氏とこれを返す崎貴三氏。要領は餅搗きと変わらない。



団子馬作りに用いる道具は満氏の手作りである。



さまざまな種類の馬の目。大きなガラスの目は1升馬に用いる。



団子を捏ねて頭の部分を作る。



頭を台に差し、前足まで伸ばす。



十四子氏は食紅で歯ぐきと舌になる部分の団子の生地を作る。



竹ペラで口の部分を三等分し、この間に歯ぐき・舌の生地を入れる。



鼻と目の部分に棒で穴を開け、眼の部分にはモクロクジュを埋め込む。



胴の部分に団子をのせ、後ろ足に向かって伸ばす。



団子馬とともに納める鯛を作る。彩色は十四子氏が行う。



タテガミと尻尾をつけたら、帯揚げや帯を幾重にも巻く。



水引で口金を手綱となる布の部分につける。

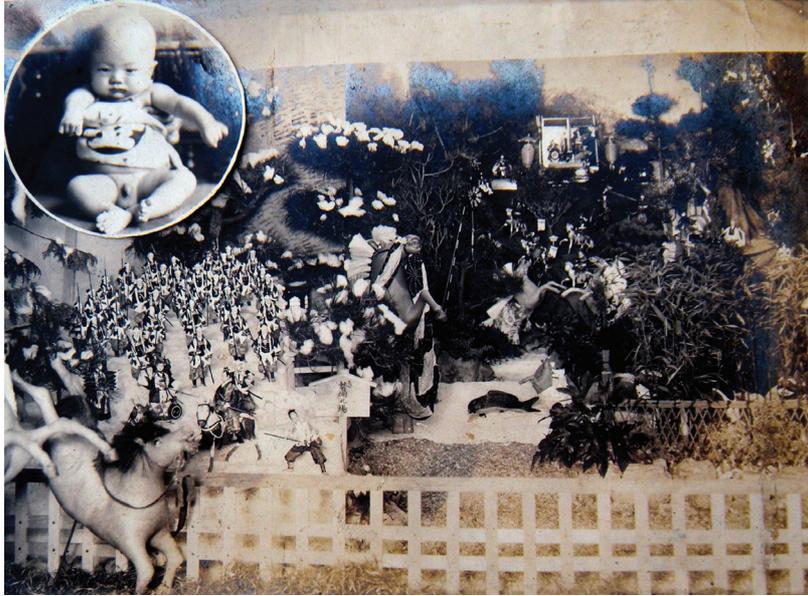


団子馬と鯛の出来上がり



何年前に作られたトビウマ (馬が宙を飛んでいるような形)。

- ② 庄弘氏（昭和6年生まれ・故人） 写真提供：庄智恵子氏



弘氏が誕生した年の馬節供の写真。背景には山が作られ、手前の川には鯉が置かれている。左側には雪景色の中に何体もの赤穂浪士の人形が立っている。手前の後ろ足を上げた団子馬には帯は巻かれていないが、奥に見える団子馬には飾りが施されている。

### 西讃地方の団子馬製作－香川県仲多度郡多度津町一

- ① 福井修氏（大正2年生まれ・故人） 写真提供：福井修一氏



修氏は団子馬作りの名人で、頼まれて作ることもしばしばであった。



鎧兜や数頭の団子馬のほか、牛や恵比須、亀、鯉の団子細工も見える。修氏の笑顔が印象的である。



景色が作られた前には何台もの祝いの膳が置かれている。



②行成恵氏の弟・海氏（昭和54年生まれ）の八朔飾り



③岸本高威氏（昭和15年生まれ）の馬は布製のように見える。

## 西讃地方の団子馬製作—香川県善通寺市—

### ① 善通寺市立郷土館



郷土館には綿でできた馬が展示されている。

### ② ベビーセンター



ベビーセンター入り口には「うま節句」の看板が立つ。



店内には神功皇后と武内宿祢の人形や張子の虎が並ぶ。

香川県三豊市仁尾町 八朔人形祭り



舞台には物語の一場面が人形で再現される。これは「安宅の関」。



真鍋人形店の「歌舞伎 地雷也」に子どもたちも思わず見入る。



仁尾町では八朔に雛節供も行う。



この年に生まれた男児のため、個人宅にも「一休さん」の舞台が作られる。

広島県福山市鞆の浦 八朔の馬出し



鞆の浦の対潮楼に展示されていた田面船。



鞆の浦で復活した八朔の馬出し。大戸から子どもを乗せた馬の台が出る。(写真提供：福山市鞆の浦歴史民俗資料館)



さまざまな大きさの馬が10数台町内を練り歩く。  
(写真提供：福山市鞆の浦歴史民俗資料館)



鞆の海歴史民俗資料館では、常時馬出しの馬が展示されている。

### 福岡県遠賀郡芦屋町 八朔の藁馬と団子雛



芦屋町では、八朔に男児、女児それぞれに藁馬の人形と団子雛が作られる。



芦屋町にも八朔に引かれた馬が残っていた。説明板には、慶応2年生まれの人が明治38年生まれの子のために制作したとある。



藁馬の上に紙で作った人形と戦国武将の名前を書いた旗がのせられる。



団子雛は、団子で花や野菜、魚などさまざまなものが作られる。(写真はすべて芦屋歴史民俗資料館内)

Research and Reports on Intangible Cultural Heritage  
Number 4  
2010

Publisher:  
National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo  
13-43 Ueno Park, Taito-ku, Tokyo, 110-8713, Japan

無形文化遺産研究報告 第4号

平成22年3月26日印刷

平成22年3月31日発行

編集 独立行政法人国立文化財機構  
東京文化財研究所  
『無形文化遺産研究報告』編集委員会

編集委員 無形文化遺産部長 宮田 繁 幸  
無形文化財研究室長 高 桑 いづみ  
音声・映像記録研究室長 飯 島 満

発行 独立行政法人国立文化財機構  
東京文化財研究所  
〒110-8713 東京都台東区上野公園13-43  
電話 03 (3823) 2241

© 独立行政法人国立文化財機構  
東京文化財研究所 2010

National Research Institute for  
Cultural Properties, Tokyo